

ごめんください、足尾のこと教えてください！

—— 地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集

この冊子を手にしてください方へ

この冊子は、平成25年度から足尾で活動する地域おこし協力隊¹が行った、生活史の聞き取りの内容を抜粋して掲載しています。聞き取りと表現していますが、最初は「足尾について教えてもらえませんか？」という立ち話から始まり、お年寄りの集まりや日常的なお茶飲み話など様々な場面で、地域の方にお話を伺ったものです²。私たちの聞き取りでは、話し手の方とつての出来事の見え方や気持ちを大切にしています。そのため、中には曖昧な部分や歴史的事実と異なっているもの、適切ではない表現などが含まれることもあるかもしれません。けれども、過去がそのように記憶され、今このように語られるということも貴重な足尾における生活史の側面だと考えています。話の信憑性について、疑問を持たれる方もいらっしゃると思いますが、「こういう生き方や想いもあつたんだな」ということで読んでいただけたらと思います。

冊子を読んでみて「自分の経験や見方とは違うので、言いたいことがある」「意見や記憶を伝えたい」という方は、地域おこし協力隊までお知らせいただき、是非お話を伺わせて下さい。この冊子が、様々な視点に出会うきっかけとなれたら幸いです。また、冊子とは別に聞き取り全体の文字おこし資料を日光市役所足尾総合支所で保管しています。

最後になりますが、貴重なお話を聞かせていただき資料化にご協力くださった皆さま、いつも私たちの活動をご支援してくださる皆さまに深く感謝申し上げます。

¹ 総務省の取り組みで、人口減少や高齢化などの進行が著しい地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進する活動を行っている。日光市足尾地域では平成23年度から導入。

2 この冊子での基本的な聞き手は、地域おこし協力隊の志村春海（以下、S）、中山京（以下、N）。また、口述史の観点から、日本大学文学部社会学科教授の好井裕明さん（以下、Y）にご協力いただきました。

02	この冊子を手にとりくださった方へ
04	凡例
05	Q1 チョリチョリって、どういう意味ですか？
06	渡良瀬川と鮎 [2014年1月10日]
07	ハゲ山のウド [2014年2月10日]
10	煙に慣れる [2014年5月19日]
11	公害の足尾というイメージ [2014年8月20日]
16	足尾小話「お客さんからのお土産」
17	Q2 坑内ってどんな場所なのですか？
18	坑夫のお父さんの仕事 [2013年7月11日]
20	カンテラの光 [2014年1月10日]
22	坑内の職場 [2014年9月18日]
28	足尾小話「坑内でのユーモア」
29	Q3 住宅の暮らして、どんな生活だったのですか？
30	鶏小屋にみえる [2013年11月26日]
34	夢のような近所付き合い [2014年1月10日]
38	部屋の広さ [2014年8月19日]
41	Q4 戦時中、外国の人とどんなやり取りがありましたか？
42	イモとコッペパンを交換 [2014年4月15日]
44	豊かな知恵を教えてください [2014年7月]
46	近所の人や進駐軍との交流 [2014年7月7日]
51	Q5 キラキラした石、見つけたのですが……
52	鉱石のようなお菓子 [2013年7月11日]
53	喫飯所で鉱石を洗う [2014年3月5日]
58	坑内のしくみ
60	おわりに
61	地図
62	年表
63	用語集
64	クレジット

〔凡例〕

- 話し手の方は、次の通りに掲載しています。
 - 1…夫婦の場合は、夫、妻。兄弟の場合は、兄、弟。
 - 2…男性はM、女性F。複数の場合はMa、Mbと表記。
 - 3…市職員は、Pa、Pbと表記。
 - 沈黙は、……。○○……。○○○。……○○○。
 - 省略は、……（省略）……
 - 話の途中で途切れている時は、「」で次の会話に続いています。
 - 笑い声はカタカナ表記。もしくは（笑）です。
 - 語りの中で誰かの発言の真似などは、「」で表しています。
 - 冊子全体の共通する用語は63頁の用語集に掲載。
その他の鉱山用語、地名や補足には注を入れ、
典拠があるもの以外は協力隊が編集しています。
 - （ ）の使い方は2種類あります。
 - 1…インタビューの場の状況や状態を表しているもの。
 - 2…文脈を理解しやすくするために編者が補ったもの。
- 〔聞き取り抜粋の編集方法について〕
- 聞き取りを行った時系列順に掲載しています。
 - 聞き取り抜粋箇所後に、協力隊2名のコメントを掲載しています。
 - 話し中に出てくる地名や言葉については、
61頁「地図」、63頁「用語集」をご覧ください。

— 01 — チョリチョリって、どういう意味ですか？

高齢者の集まりで押し花を作る場面でのこと。会場付近で昔は植物が見当たらなかったのが、遠く（豊潤洞「1」）まで花を摘みに行っていたという話になった。その中で、「煙で植物がみんなチョリチョリになった」と皆さんが口々に言っていた。この「チョリチョリ」、私たちにはあまり馴染みのない言い方なので意味を尋ねると、製鍊からの煙で植物がチョリチョリ（枯れたような、しなってしまうような感じ）になってしまうという意味だと知った。当時チョリチョリにならないように煙が来たら植物に新聞紙を被せて守ったという話は、このような会話だけではなく、新聞記事でも確認できる「2」。「公害の町」というイメージが先行し、実際の生活ではどのような風景があったのか知らなかった。少し聞きづらいとも感じていた公害の話題だが、実際の生活の中に馴染みのある場面として、ふと登場する。

渡良瀬川と鮎

〔2014年1月10日〕夫、妻、志村、中山

偶然お会いした方に、仕事から生活風景、人間関係や当時のお気持ちなどの話を聞かせていただいている。初めてお話を伺った時は、台風時、銅山の施設が浸水し、水処理をする専門の方が苦労されたとのこと。そこから公害の話題になる。昭和30年代の話。

夫—それで、鉍毒問題が出ると駄目なんだよな。インチキもある。鉍山も大変だった。……だから魚なんか今、渡良瀬川の

下流あたりで、鮎釣りやっているでしょ。あれだって始めはその人らがずるくてさ。鮎を渡良瀬川に放して、「死んだら鉍毒のせいだ」って言って賠償とる気になって、始めはそれでやったんだよ。鮎放して死んだらそれ調べて、「これは鉍毒、鉍毒で死んだ」って。そうしたら、鉍毒が入ってないで、いたずらとかあいうので死んだって。だから一匹死ぬと大変だった。持ってきて調べて、「鉍毒だ」って言ったら直ちに「賠償とるべ」ってその人らがわざと放したんだから。鮎を。いたずらばかりなんだもん。モリで突かれたとかそういう跡ばっかりあって。んで、今度はそ

こあたりで鮎釣りやっているもんね。……だからもう、目の敵でいるんなのを取る気でいたんだよ。

S ーふーん。

妻 ーフフフ。

夫 ーそういうあれがあるんがね。それそのやつが言っていたもん、「まさか渡良瀬川で鮎釣りができるとは思わなかったよな」って。頭のやつが言ったんだべ。「鮎が死んだら賠償取れっから放してみんや」って。そういうのがいたんだよ。そうしたら、「死なねえんだよな」って言って。

一同 ーハハ

妻 ーね、

夫 ー「鮎が死んだら……」って言ったから確認してみると、「先が突かれたとか、跡があるから駄目だよ」って。知っている人はね、近くで鮎釣りができるって喜んでね。

妻 ーフフ。

【お話を聞いて】

S ーネガティブな内容や、当時だったら嫌な部分の内容でも深刻な感じにならずに話してくれた。鮎の例でも最後の「死なないんだよな」のくだりは皆で大笑いした。実話として嫌な気持ちもあるのに、一気に笑い話になってしまったのが不思議だった。鮎を川に放した人の様子も目に浮かぶようで、人間らしさを感じた。

話し手の人柄のおかげで、こういう話題にユニークさが加わり、嫌な気持ちだけではない形で今知れることが凄い。また、笑い話だけでは収まらない出来事の周辺で起った事実も伝わる。

N ー鉱毒による被害は広く研究されてきたが、このような足尾の住民が見聞きしたことや、古河が激動の時代に、当時の知識や技術を結集させて公害対策に取り組んだこともまた事実であると思う。様々な立場の方の色々な記憶を残すことが大切だなと思った。特に、公害対策に取り組んだ方々のお話を伺っていきたいと思う。

ハゲ山のウド

【2014年2月10日 夫、妻、志村】

足尾では山遊びをしている方も多く、このご夫婦は山菜やキノコ採りなど、季節ごとに山の幸を楽しんできた。ハゲ山として知られる、松木エリア【3】も昔は遊び場の一つだった。昭和30年代までの松木の話。

妻 ー会社の社宅が松木の方にもあったの。

S ー松木の奥にですか？へー。それはどういう人が暮らしていたんですか？

夫 ー会社の人とか、

妻 ー製錬所に通う人とか、本山坑に通う人、そういう人たちの

社宅があったの。

S — あ、松木にもあったんですね。へー。でも今って、ゲートで仕切られちゃっているじゃないですか〔4〕。昔は松木の方に自由に行けたんですね。

妻 — 私らも行つて、ウド採りなんかをして。

夫 — 昔は松木にウドが出たんでね、

S — あ、そうなんですか。私はもうゲートがある状態から来ちゃっているの、なんて言うのかな、松木は立ち入り禁止の場所っていうイメージじゃないんですけれども。皆さんからのお話を聞くと、松木の川で遊んだり、松木を越えて中禅寺まで遠足に行つていた〔5〕とか、そういう話を聞くと、同じ場所なんだなと思つて

妻 — いい所なんですよ。

夫 — こっからよく、松木の久蔵を通つて、中禅寺にみんな行つたんですよ。

妻 — 歩いて山越して。

S — ああ、なんか遠足とかで行つたつて聞きました。じゃあ、松木に遊びに行つたりしたんですか？

妻 — みんな、この辺の人なんかも向こうに遊びに行つたの。

S — 遊びに行くつていうのは、登山とかそういう、木の実とかそういうのを？

夫 — 採りながらね。

S — へー、ウドか。

夫 — 山のウドはいい香りがしてね。旨いですよ。

S — へー。

妻 — いい所ですよ。

S — 足尾のいろんな方の話を聞くと、キノコとか山菜とか山椒もそうですよね。山ウドつていうのは、普通のウドとは違うんですか？

妻 — 違うの。あのね、山のこう、ズリ〔6〕つて言う、砂になつて山が崩れているんです。その中にウドが出てくるんです。

S — へー。

妻 — だから、その中を掘つて行くと、白いウドが真すぐに生えているんですよ。今はトンネルで作つていてでしょ、ウド、白いの。あんな風なの。それもね、自然の山のあれだから、香りがいいんですよ。全然違いますよ。

S — 今はどう松木には生えていないんですかね？

妻 — 今はどうね、無くなつちやつた。絶えちやつたの。みんな採りに行つたりなんかしてね、根をみんな持つて来ちゃう人がいるんですよ。

S — そうなんだ。

夫 — 芽がいくらか吹いたから、

妻 — それでほら、今度は山の緑化が進んだでしょ。それなんであ

の木が生えると日陰になっちゃうから、駄目なんです。

S あし、なるほど。ちなみに、その松木の場合って、その山に遊びに行っていた時は、やっぱりそのハゲ山だったんですか？

妻 そうそうそう。ハゲ山が多かった。

S じゃあ全然、

妻 今と違かった。今と違う。

S なんか、ハゲ山、ハゲ山って言われて、木がないっていうのは、頭ではわかるんですけども、どういう風景だったのかがあまりわからないと言うか。

妻 わかんないよね。

夫 ウドなんかが出て、鹿とかんかがみんな食べちゃう。新芽の上を。

妻 ハゲ山っていうか、そうね、何て言ったら良いだろうね。あの、道路の所に石がいっぱいあつて歩くでしょ、石が一杯あつて。

S 全部ですか？

妻 全部、山が全部そういう風になっていたの。

S 砂利みたいな感じですか？

妻 そうそうそう。そういう山なの。

S じゃあ、土が無い？

妻 ない。土が無いんです。

夫 昔の製錬の煙で、岩がみんなやられちゃって、粉になっちゃう。

S へー。

妻 粉になっちゃうんですね。岩が弱って。それがそういう風に、ざらざらになつて。

S 岩が弱って、岩が更に砕けちゃうことなんですね。

妻 そうそうそうそう。

S それって、危ないですよ？

妻 危ないんですよ。

S ズルズルって、登つても滑っちゃいますよ。

妻 ズルって、下まで行っちゃいますよ。

夫 だから、行くとカモシカとかが落っこちて、死んでいることがありますよ。

S ーん、カモシカがですか？

夫 カモシカなんか？

S へー。でも、人間もそこでウド採ったんですね？

妻 そうそうそう。気をつけないと。

S 気をつけて、その這って行つて？

妻 這って行つて。

S ーえー、難しそう。

【お話を聞いて】

S 今の松木の様子と、岩が砕けるという表現で、初めてハゲ山がどういふものだったのかイメージできた気がした。偶然が上手く

重なり美味しいウドが芽生え、砂利山を這ってウドを採りに行く風景もあつたんだ」と、驚き。そして何より、本当に楽しそうに、美味しそうに話してくれたため、松木のウドを食べてみたかったと思わずにはいられなかった。

煙に慣れる

〔2014年5月19日〕Fa、Fb、Fc（Faの娘、志村、中山）

商店出身の幼なじみのお二人。町部⁷からみた、銅山の社宅暮らしについて伺いました。現在80代のお二人の話に、片方の娘さんと私たちが加わり、昭和30〜40年代の様子を思い出してもらおう。

S ―ハゲ山についての話を伺うと、子供が山に遊びに行っても草が生えていないから姿がすぐ見えて安心したとか、煙が来た時に新聞紙を植物にかけていたというのも聞いたのですけれど、そういうのってあつたんですか？

Fa ―そういう風にしないと。朝、煙が流れてくるんだよね。

Fb ―製鍊の煙が朝に町部に来んですよね。

Fa ―でね、みんなね、何か作り物をしている人は、みんな植物に新聞をかけたんですよね。

Fb ―新聞をかけたってね、隙間から煙は入っちゃいますよね、それでもいくら違うんでね。

Fa ―私もすっかり忘れていたけれども。

Fb ―花の咲いている人はみんなね、そういうのやった。

Fc ―私の小さい時の昭和40年代前半もやった。

S ―あ、じゃあ結構最近までのことではないんですね。

Fc ―いやあ、だいぶ前だよ、ハハ。

S ―やっぱり今の山の風景とは違うんですか？

Fa ―全然違う。あのね、町部はそんなことないですよ。

Fb ―赤倉、製鍊の近所ですね、あのハゲ山見るとね。

Fa ―私ね結婚した昭和31年にね、嫁ぎ先の関係で赤倉に行って1週間暮らしたんですけれども、もう煙だね。初めて、同じ足尾にいてもね、もう真紫、煙が。もう喉が痛くて痛くて、いられなくてさ。1週間だから我慢していられたけれど、私、そうじゃなければいられなかった。で、あそこに住んでいる人はそれが普通になっちゃう。

Fb ―でも、赤倉に1週間いたんだ。

Fa ―1週間いたんだよ、お勤め、お勤め。ハハ。お勤めの意味でいたのよ。それでね、子供の時からそこにいた人はもう、平気ね。やっぱりその嫁ぎ先に住んでいた子供は煙が平気ですよ。やっぱり慣れちゃってね。

S ―そういうのあつたんだ。

Fa ―だからあの辺の山はまるっきりのハゲ山。草一本生えていな

かったもんね。

Fb—茶色かったもんね。

Fa—そうそうそう。今行くと青くなっているでしょ？

N—天皇陛下も青くなっているのを見に来ますもんね〔8〕。

Fa—どのくらい青くなっているかをね。

「お話を聞いて」

S—コンパクトに感じる足尾の中だけけど、住民同士の「同じ足尾でも」わからない場所があったというのが住んでいる人の感覚のようだ。各地区で日常生活が事足りていたのだと思うし、煙が溜まる所と溜まりにくい場所がはつきり分かれていたんだな、と地図を見ながら想像する。

N—足尾に来て、住民の皆さんからお話を伺ううちに、煙害がひどかった地域とそうでもなかった地域があるということがわかっていった。また、昔の写真を見ると、いかに足尾に緑が戻ったかがわかる。昭和30年に導入され、多くの女性が活躍した植生盤による緑化に関する聞き取りももつと行っていきたい。

公害の足尾というイメージ

〔2014年8月20日、M・志村・中山・好井・Pa・Pb〕

公害に関して聞きたかったポイントは、①生活の中にあつた風景や感じたこと、②銅山従事者として公害にどう向き合い感じて

いたのか、の2点。閉山後も銅山関係で働いていた方と、足尾育ちの市職員2人も加わり、それぞれの経験を交えながら、昭和30年代から閉山あたりまでのことを思い出してもらおう。

S—私が足尾に来る前はどうしても教科書の「公害の足尾について」イメージが強くて、実際はどうだったのだろうと思って来てみたんですね。煙が町に来た時に野菜とか、植物に新聞紙を被せたっていう話を聞きます。そういうことって、子供の時の記憶でありますか？

M—結局、もう煙がせめて来るっていうのはわかるんですよ。もう、あの、いると。

S—えっと、それは煙に色とかがついているんですか？

M—製錬の方から風に乗って、うん。やっぱり植木なんか大事にする人は多分そういう風になったんだと思うんだよね。

S—やっぱりチョリチョリになっちゃう？

M—あの、喉なんかやられたりなんか。うん。だけど我々が物心ついた昭和30年代はもうそういうのはなかったよね。だからその前が凄かったんだ。うん。だから通洞あたりは結局ハゲ山にはならなかったから。うん。

Pa—たまたま山がガードになっているから。

S—やっぱり本山に向かつてのエリアなんですな〔9〕。



上：松木ダム昭和35年。下：早春の釣り。芝の沢の下の川
(伊東信撮影)

M ― 田元交差点から本山の方は、そんなに酷い所はなかったね。

Pb ― ただ、やっぱり自溶製錬が31年に出来た「10」後の俺が小学校低学年の頃だから、その30年代の後半くらいには松原まで煙が来て。やはり喉が痛い、目が痛いというのが、そういう日が年に2、3回。

S ― そういうじゃあ、年に2、3回のそういう煙が町部まで来る時っていうのは、例えば通常よりも多く作業していたとか？

Pa ― ガス抜きしていた。新聞にも載っているんだけど「11」。

S ― ちなみに他所から足尾を見ると、どうしても「公害」っていうイメージが強くなっちゃていと思うんです。そういうイメージで、例えばMさんが働いていた頃には浸透してたんですかね？

M ― 別に従業員の中では、公害に対する意識っていうのはたまたまう。その、閉山になつてからの方が騒ぎ始まったから、そういういろいろなこと。

S ― あ、閉山以降に？

M ― うん。閉山前っていうのはそんなに大きな騒ぎっていうのは無かったから。だから田中正造さんがどうのこうのつていうのは、閉山の頃の従業員っていうのは、そんなあれ持っていなかったから。その当時は。閉山になつてから、こういう大きな騒ぎがだんだんだんだん出てきたような気がするね。そうだね、閉山前そんなに大騒ぎしていなかったものね。

Pb ― そうですね。だからその煙、製錬の煙にしても、親父は製錬だったから別にその、「ああ今日は煙が酷いね」くらいの話しか。

M ― ないね。

Pb ― 会社が悪いとかそういう認識はないですね。

Pa ― それが日常だから。

M ― 我々だって、全然公害がどうのこうのつて、全然その、考えたことないもん。もう、なんて言うのかな、地域に密着して住んじゃっているからさほどね、うん。大騒ぎしないけれども。逆に閉山になつてからマスコミが騒ぎ始まったから、余計にそういう風になつてきて。

Pb ― 松木の山自体、Mさんにしても俺にしても、もう生まれた時から、

M ― ああいうんだから。

Pb ― ええ、いわゆる荒廃の、ハゲ山だったから。それが当たり前。

M ― そういう感覚がないもんね。

Pb ― そうですよ。

Pa ― 山の絵を書けば皆茶色い色。……

M ― 「何騒いでいるんだ」って、最初は、ハハ。何でそんな大騒ぎするんだろうつていう。ただね、下流方面でそういう風に大騒ぎしたつていうのは、そういうのはまだ耳に入っていないから我々には。うん、だからさほど、その公害に対するそういう考えつていう

のは全然持っていなかったよね。これで食べてきたんだもんね。うん。ただ後からいろいろ話を聞くと、あ、酷いこともやったんだな、っう感覚はあるけれどもね。今はね。

Pa 一下流は水の害。鉋毒で、地元は煙の害。……

M 一まあ、とりあえず足尾の人間なんっていうのは、さほど公害に對しての考えは誰にしろ持っていなかったと思うよ。うん。

Pa 一でも、神子内川では泳いだけれども、渡良瀬川では絶対泳がなかったね。ハハ。

M 一だからそれはね、徹底している。それはね、足尾の人間はやらない。

S 一え、それはどういう理由からですか？

M 一結局、松木沢、久蔵沢と仁田元沢や、本山の出川が本山の横を通って流れて来ているだろ。であの、神子内川はあの渡良瀬の所で合流しているわけ。で、だからその渡良瀬の三養会の下の所では泳ぐけれども、合流地点はその公害関係の水が混ざっちゃっているってことで、その下からずっとここまでは、

Pa 一誰も泳がない。

S 一そういうものだって伝わっていたんでしょか？ 親とかから教えられて、「じゃあ、その川で泳ぐのはやめよう」っていう風になっていた？

M 一向原の川の、川の近くまでは皆、川遊びしていたけれども、

渡良瀬川の近くはやらない。

Pa 一ダムより上は泳いでいた。

M 一そうそう。

S 一そうすると、やっぱり本山エリアの人たちっていうのは、まさに煙もだし、川の水も泳ぐのは控えなきゃいけない、となりますよね？

M 一だから、本山関係の人らは山を越えて庚申川に遊びに行くんだよね。

Pa 一舟石を越えて、旧林道。

Pb 一昔の写真を見ると、松木で泳いでいた子供の写真なんか結構ある。

M 一松木エリアにある松木沢、久蔵沢、仁田元沢の3つの川が流れている所で良く遊んでいたもの。

Pa 一あそこは、ゲートができるまで遊んでいましたもの。

M 一そうそう、魚釣りなんかみんな入ったんだから。あそこ。

Pb 一だから煙害はあったんだけど、河川の影響っていうのはそれほど無かったのかな。

M 一沢釣りの人は随分入っただろうね、子供はガラス箱とヤスでカジカやイワナ、ヤマメ釣りをして遊んでいたからね。……我々はただ、「渡良瀬川っていうのは泳ぐ所じゃないよ」っていう、そういう感覚は小さい頃から植え付けられているから。

Pa 一 大黒橋の合流付近からが渡良瀬川って呼んでいたから。

D ー うん、そうそう

S ー じゃあ、神子内の方は違う？

Pb ー まあ、わざわざ渡良瀬川で泳がなくても、神子内川にしても内の竈川、そういう綺麗で淵のある川がかなりあったから。

「お話を聞いて」

S ー 足尾に來た当初、町部から見える渡良瀬川は透明で綺麗に見えたけれど、「人が住んでいる所の水では誰も遊ばない」と教えてもらい、「足尾の人は、ただ綺麗な水で遊ぶんだ!」と驚いた。昔から教わっていた川の境目の話が、少しは今にも影響し

ているのかも……。公害について騒ぐつもりはないと言いつつも、川の泳ぎ分けの例のように確かに生活の中での意識はあった。改めて公害を考えてみると、他にも何か思い浮かびそうだし、ずっと住み続けていると公害を立ち止まって考えることが難しいのかもしれない。

N ー 住んでいると「あたりまえ」で疑うこともなく慣れてしまうことがあるのだと思う。社宅では電気、水道代がタダであったのだが「今でも時々水を出しっぱなしにしてしまう」という声を多く聞く。企業城下町であった足尾の人々特有の慣れは、奥が深くとても興味深い。

1 陸奥宗光の次男「潤吉」が古河市兵衛の養子になったことが縁で、陸奥宗光の別邸を柏木平に移築した。現在は残っていない。

2 「白い煙」が襲う。公害の原点、いまなお「朝日新聞」昭和46（1971）年10月1日金曜日「栃木県版」。

3 高原本、安藤沢など、足尾から中禅寺湖に向かうエリアなどを指す。

4 銅親水公園から松本エリアに向けての道には、足尾砂防えん堤上流工事用道路のゲートがあり、一般車両は通行禁止となっている。

5 昭和60年代くらいまでは、小学校の遠足は、松本から中禅寺湖までのピクニックが定番だった。往復8時間の道のり。

6 「研すり」。本来の意味は「磨石のことだが、粗鉱を含めた発破で起すしたものを全般を指すようになった。（村上安正、「足尾銅山史」、随想舎、2006年、600頁）

7 銅山関連施設のすぐ近くにある社宅や三養会エリア以外の商店街エリアのことを町部と呼ぶ。赤倉、松原、赤沢など。

8 平成26年5月21、22日に天皇、皇后両陛下が1泊2日の日程で栃木県と群馬県を訪問。22日には足尾の銅親水公園や環境学習センターを訪れ、松本地区の緑化をご覧になった。

9 田元の交差点から松本に向かっての、間藤、赤倉などのエリアを指す。

10 昭和31（1956）年、「自溶製錬法」、「電気集塵法」、「接触脱硫酸法」を応用した脱硫酸技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功。

11 2の新聞記事のこと。

足尾小話「お客さんからの土産」

昭和20〜30年頃に子供だった方から見た、古河に勤めていたお父さんのお客さんの話。

M 足尾では、水力発電を自前で持っていたわけだから、他からの電気を使わずに銅山運営やつていたね。

S ーそういうような技術を駆使したことを足尾でずっとやってきたんですね。そんな風景って、生活にも染み付いていると思うんですけども、大学で足尾を離れた頃に、足尾の特殊性などを他所に行つて改めて感じられました？

M ーなんて言うんだろうな、足尾に集まった職員集団みたいな……。つまり、古河で働いている人は、東大卒とか旧帝大系を出た優秀な人たちがうじゃうじやいたんだよ、いっぱい。私の子供の頃はね。うちの親父も古河で働いていたんだけど、そうすると、たまたまこの家にそういう人たちが酒飲みになんかよく来ていて。だからね、多分栃木県内では、当時の我々の子供だった頃の足尾の社会っていうのは、もの凄くハイソサエティだったと思うよ。俺は。

S ーきつと話している内容もそうなんでしょうね。

M ー当然で、連中は東京から来るわけだから、お土産に持ってくるものはね、子供がいっぱいいる家っていうのを知っているわけだ。それでその人たちが来る、もうとても我々が目にしたことのないようなもの

のなんだな、お土産が。

S ーなんてすか、それ、例えば？

M ー例えば、私が今でもよく覚えていたのはね、鉛筆あるだろ。鉛筆1ダース。俺の名前が打たれているわけだよ。

S ーあ、なるほど。

M ー名前入りの鉛筆。

S ーあ、版が押してあつて金とかで名前が書いているやつですね。

M ーそうそう。あんなの、カルチャーショックだぞ。

S ーたしかに昭和20年代の話ですもんね。「凄いな」てなりますよな。

M ーうん。それから、今はこんなのあたりまえだけれども、電気の湯沸かし器とかね、

S ーそういうの、当時もあつたんですね。

M ーこの間、子供の家に行つたら電気湯沸かし器があつてこれ、お父さんすぐ沸くんだよ」なんてね。「こんな陶器のお皿に置くとすぐ沸けちゃうんだよ」って言ってたけど、あんなの俺たちがガキの頃にあつたよ。

S ーハハ。でも、そういうのがお土産で……。へ、凄いな。

M ーで、だって我々が子供の頃、もうコーヒー沸かして飲んでたもんな。

S ーそうなんですか、なんかコーヒーとか結構、どのくらい世代だったかわからないですけども、やつ

ぱお洒落なものとか、結構貴重なものだった時代があつたということを、聞いたことがあるような。

M ー多分、私は昭和18年生まれだけど、その頃、まさしく小学校の低学年だったんだけど、そのころに、パークレターでコーヒー入れていた家なんてないぞ、あんまり。

S ーハハ、凄いなあ。

M ーそれはね、全部ね、そういう人たちが文化を持ち込んだわけだ。

S ーは、そういう人たちがモノだけではなく、使いや方や楽しみ方とか、そういうのを全部。

M ーそれからそういう人たちが話している内容を、それとなく、こういう小さい家だから全部話が聞けるわけだわな。全部。その内容のレベルの高さというかね。だから、そういう風土というのは、もう、その門前の小僧じゃなくても、結局、染み付くんじやないかな。自然と。

S ーなるほど。

M ーそれと、今思えば、そんな人たちは足尾に来るのに東京から自家用車で自ら運転して来るんだよね。車種は何だったかわからなかったけど、時代から推測すると、ルノーかオースチン、あるいはヒルマンあたりじゃないかと思うんだけど。子供ながらに、そんな自家用車がうじゃうじゃ走り回っている東京ってどんな所なんだろう……。と想像を膨らませたのを覚えているよ。東京に一度行ってみたいなつてね。

— Q 2 —
坑内ってどんな場所なのか？

観光用新坑口工事中出口
昭和54年10月20日（伊東信撮影）



観光施設の足尾銅山観光「1」では全長1234メートルある坑道のうち700mが公開されている。その先は柵越しにライトを照らしながらごく一部を覗くことしかできず、現在の足尾しか知らない私たちにとつて、坑内は遠い場所だ。「坑内には野球場くらいの広さの空間がある」「坑内で、奥に見える光めがけて進むと10分歩いても、その光にたどり着かなかった」などなど、足尾の人から耳にする坑内にまつわる話は、想像し尽くせない。今、実際に坑内で働いていた元坑夫さん「2」から直接話を聞ける機会は案外少なくなってしまった。

坑夫のお父さんの仕事

「2013年7月11日 一兄、弟、志村、中山」

昭和10年代後半に生まれ、昭和35年まで足尾で暮らしていたあ
るご兄弟のお話。小滝坑に勤めていたお父さんの仕事について、当
時の子供目線から覚えていた内容をお伺いした。

S — お父さんに、坑夫の仕事のことを何か聞いていましたか？ 変
な質問なんですけど、「仕事は大変だ」とか…。

N — やっぱ危険と隣り合わせ？

弟 — どんな感じなんだろうね。私も自分の子供には、仕事の話
を全然してないからな。ハハ。

兄 — でもなんか楽しそうに、集まりがあつて、割とすぐに帰宅
するとう感じてしたかね。そんなに締め上げられて働くよう
な感じではなかったような気がするんですよ。……でもね、
なんか働いている時間は短そうなこと言っていたね。坑内では長
くは働いてられないと思うよ。朝から晩までね。本当にまと
もに働いたら体がもたないですよ、きつとね。だから、親父は
結構喜んで働いていましたよ。……（省略）……余暇とか娯
楽、夏の日の長い時は仕事が終わると野球、テニスを楽しんで
ましたね。また、若者は柔道、剣道をしていましたね。用具も施
設も整っていました。あとはやっぱり神様っていうのかな、足尾の
人は山を大事にしていたみたいですね。月1回は親父も朝早

く出ていくんですよ。一日は間違いなく行っていましたね。「今日一日だつて」言つて、いつもより1時間くらい早く出て、それでちゃんとお神酒かなにかをやるんでしょね。見たことはないんですけれども。

弟—それは坑内にあるんかね？

兄—坑内の入り口かな？ 坑内の入り口が何かに、ちゃんと朝、毎日一応はお参りはしているんだろうけれども、月一はちゃんとしていた。今日はお参りつて感じて、服装もちゃんとして行っていましたね。ネクタイなんかはしていませんでしたけれども。あの普通の人は、服装は鉾員だから作業服で行っちゃうんですけれども、普通の服を着て行つたから。ネクタイまではいかなければいけません、その日だけはちよつと違うんだ、なんかね。

S—そんな話は初めてですね。

兄—月一、一日つていうのは僕は記憶にありますね。なんか、お袋なんかも弁当を作つたりするのがあるから、早くからやつていたみたいですね、そういうのは。

N—あ、ちなみにお弁当の内容つていうのはどういふのだったんですか？

S—やつぱり厚い弁当箱なんですか？

兄—あのね、薄くなるのはずっと後ですよ、足尾は。

弟—俺が知っているのは薄い弁当箱だったけれども。

兄—あそう、俺の頃はやつぱりドカベンといわれるんですよ。でつかいやつて。ドカベンですよ。

S—それにお米とおかずなんですか？

兄—一緒ですね。

弟—思い出してみると、イカの塩辛を梅干しのようにお弁当箱の真ん中に埋めたおかずが大好きでしたね。

S—ちなみに、ちよつとネガティブな話になっちゃいますが、事故の情報は社宅にもすぐに伝わってくるものなのですか？ あんまり子供だから記憶ないでしょうか？

弟—俺の記憶だとすぐわかる。外で遊んでいるとサイレンが鳴る。そうすると周りの大人たちが、ざわざわざわざわする。すると誰かが、「あーだ、こーだ」つて話になる。サイレンつていうのはね、毎日定時には鳴るんですけどもね、鳴らない時間に鳴る時があるんですよ。そうするとそういう落盤の事故なんですよ。

兄—何回も聞いたことある。

弟—うんある。そんな話しょっちゅうある。しょっちゅうつていうか、まあ、あるわね。だから親父だって部下の人たちにはよく言っていたらしいのですが、「下着だけは綺麗にしておきなさい」つて。兄—何があつてもいいようにね。僕もそういう話はあつたけれどもね、直接あつたのは、僕の同級のお父さんが事故で亡くなった。その話はよく知っている。そこでやつぱり葬式。その葬式がやつぱ

り凄いで記憶にある。それしかないですよ。葬儀には、楽団のビッグバンドが入るんですね、ブラバンの。それだけは覚えていてほしいですね。

S — その演奏はやっぱ、古河がやってくれたんですね？

兄 — そうでしょうね。やってくれたんでしょね。

弟 — 楽団っていうとそれ古河だ。

兄 — 事故の記憶といえ、それ一つしか知らないんですね。

「お話を聞いて」

S — 他の人からも教えてもらった葬儀の話題と通じる所がある。「下着だけは綺麗にしなさい」と声を掛け合ったり、山の神様を大事にしていたという習慣は、理屈どうのこののを越えて、働いている人ならではの感覚や常識のように感じる。

N — 葬式に古河の楽団が来たことに驚いた。足尾に来て、古河が手厚い福利厚生や文化活動を奨励したことをよく耳にする。付属の学校や病院もあつたし、家や道路の修理まで行つたという。また、運動会やお祭にも力を入れ、それらの写真を見ると信じられないほどの盛り上がりを感じ取ることが出来る。

カンテラの光

〔2014年1月10日〕M、志村、中山

坑内の道具の一つ、カンテラ「3」にまつわるお話。

S — カンテラとか銅山の道具一式で、やっぱ皆さん自分のものを持つていたんですか？当時働いていた人は？

M — カンテラから始まって、途中でキャップランプ「4」になったから。カンテラを大事にして、ほとんどの家があつたかもしれないよ。だから、キャップランプになるまでは、みんなカンテラをつけて行つたから、山でもなんでも。男体山行くのでも、カンテラで行つたからすぐわかるんだよね、「足尾の人が来ているな」なんて。

S — えー。

M — もう、カンテラの光が違うから。「おお、誰だ、あれは？」って全然違うから。こうやって、山歩いていると、男体山登りなんて、「あれ、足尾の人か？」「あれ本山のあれだよ」って。

S — 光でわかるってすごい。

N — カンテラってどのくらいの光が出るもんなんですか？

M — あれね、火が出るでしょ？やっぱそのままじゃ駄目で、やっぱ照り返していうんかね。

S — 丸い部分のことですか？

M — それを、自分で作るんだよね。

S — へー、作るんですか。一人ひとり作るんですか？

M — 自分で照り返しみたいなのを作るのさ。それを作るには、電話のベルかな。電話のベルなんかを、ダンダンダンダンって叩いて。



通洞坑口前にて記念撮影 砂畑主婦の会 坑内見学(伊東信撮影)

S | 坑夫さん以外で坑内に行ったことのある人は少ないのだが、
何人かの女性の方から見学に連れて行ってもらったという話もたまに聞く。

S ―へー。

M ―それが一番良いって。それで磨くんだよ。真鍮磨きっていつて。

S ―磨かなくちゃ駄目なんですか？

M ―鏡みたく磨かなくちゃいけない。

S ―ちよつと見たくなる、その磨いている姿も。

M ―それを自分らで、真鍮を丸く切つて、真鍮の板があれば切つて、トントントントンと叩いて突くの。それを、もう暇さえあれば外してこう、中でも仕事の合間とかに磨くんだよ。それは自分のあれだから、だから、「何メーター先まで俺のは見れる」とか。

S ―やつぱり上手い人は、ずっと先まで見れるのですね。

M ―あんまり真鍮部分をでかくするとね、邪魔になるとかあるけれども。本当にね、パツと明るく、

S ―凄そう！

「お話を聞いて」

S ―カンテラが懐中電灯のように山登りなどでも使われていたことが面白い。自分で手直しも出来て、案外使いやすいのでは。他の人も、カンテラの中に入れるカーバイトで火遊びをしていた、という話もよく耳にすることから、一般的な道具だったようだ。

N ―手作りのカンテラにはそれぞれ愛着や誇りがあつたようだ。話にもあつたように、カンテラが使われなくなつてからも、ま

た閉山になつてからも自宅で大切にしている方が多く、何度か見せていただく機会もあつた。

坑内の職場

「2014年9月18日」M、志村、中山

坑内の線路を作る線路夫だつた方のお話。閉山までの坑内の日常や感覚。

S ―なんかあの、銅山観光とかでは、エレベーター「E」みたいなやつを見たりするんですけども、あれに乗る時つて、振動だつたりスピードも結構早いですか？

M ―早いね。遅いのと早いのがある。

S ―あ、遅いのと早いのがあるんですか。

M ―場所によつて早い所と、遅い所がある。ケージの枠が見えるんだから、枠がくつついていて、枠が見えるわけだよ。

S ―結構怖くないですか？

M ―怖くはない。

S ―怖くはないんですか。へー。

M ―危ないんだよ、手なんか出していたらやられちゃう。だつて、手出ちゃうもん。

S ―ですよ。本当にあの枠の中にピタッと収まって動くんで

すよね。

M ― 中には10人乗れるようになってるんだよ。

S ― 10人も乗るんだ。

N ― エレベーターでの怪我、事故も結構あったんですか？

M ― えー、落っこったこともあるんだよ。落っこちちゃって。

S ― 落っこちちゃう。

N ― じゃあ、もうそうしたら？

M ― 綱が切れて。

S ― えー、怖い。そうするともう全員ですよね。一気に本当に450メートルとか。

M ― そうね、最初に300メートル。そして、また違う所に150メートル下に行くから、450メートル地下。足尾ではそこが一番深いね。落っこちやったのはたまたまだよね。ブレーキがあるんだけど、効かなかったんだよね。落っこちてね。

N ― え、じゃあ全員お亡くなりになった？ その事故の時は？

M ― いやあ、その時は一人くらいだったんじゃない？

S ― あとは怪我とか？

M ― べっちゃんだよな。

S ― やー、怖いですね、本当に。：

N ― 坑内での、300メートル下の熱さっていうのはどんなものですか？

M ― 足尾では一番下が、300メートルから更に150メートル下から合計450メートル。坑内の温度は34度はいつでも、湿気が凄いんだよね。

N ― そうすると、仕事も何時間も出来ないですよ？

M ― もう決まっているから、時間で。長時間動くことなんて、出来ない、出来ない。で、俺らみたいに熱い所で働く時は7時間。普通の所は8時間働く。下は7時間で、手当がつくんだよね。だつて熱い所に行っているからね、ハハ。クーラーが坑内に入っているんだけど、歩く廊下の所には涼しさが届くんだけれど、作業の所までは届かないんだよね。

N ― でも、7時間ずっと、そうなんですか？

M ― いやあ、仕事をやっているのは12時半くらいまでだよ。それ以上はやらない。その後は飯を食って帰ってくるようだから。飯を食ってそれで「ああ、帰らな」って言って、坑口に2時に出てくると、判座「6」をかけて、風呂に行く。

N ― じゃあ、え、ごめんなさい。出勤が何時ですか？

M ― 7時。坑内関係は、朝7時から始まって、熱い所で仕事をしている人は午後2時まで。2時までに坑口に出てくる。他の人は2時45分まで。

N ― で、7時から2時間くらい仕事をして、

M ― まあ、それはもう、そういう感じで「7」。

S —いろいろ、移動とかもありますよね？きつと坑口に入ってくるのも。作業の場所に行くまでも時間がかかるものなんですか？

M —そこは電車が出ていたでしょ、だいたい4キロかな、俺らがいた時は。4キロ。4千メートル。それで、帰りは歩くだろう？4キロ歩くだろう？

S —じゃあ、本当に、移動でも時間がかかりますよね。へー。

……（省略）……

S —いやあ、凄いなあ。全部人力で線路を敷くんですよ、凄い。でもそういう人力で、例えばですけど、線路を坑内に1日で何メートルくらい作れるんですか？

M —いやあ、何メートルっていうことないよ。あれは。18尺のレールを半分に分けてから運ぶんだよね。じゃないと上がっていきないうがね。

S —材料自体をつてことですね。じゃあ、そうやって材料自体を半分にして運んで、で1日作業をした場合って、例えばどのくらい？
M —いやあ、……あれをだつて……発破かけたつて、1メートルくらいしか進まない。発破をかけると1メートル。線路の作業は、線路を半分の9尺にしてそれを担いで坑内に運んで行くんだけれど、3日か4日作業を続けないと線路が入る大きさにならないからね。あとは、ズリをとる人が線路を「延長してくれ」つて言えば、俺がそこに行って延長するわけ。そうじゃなきゃ行かない、



昭和28年 朝の出動入坑（伊東信撮影）

俺も。とにかく裸だし、本当はおつかないんだけれどもね。熱くて
いられないがね。便所場もああい、どうしようもないよ、坑内
だから、どぶ。どぶが流れているから、そこに小便でも何でもし
ちゃうんだから。下で顔洗っているんだから、

S、N—えい、

M—だつてしょうがないがね、分からないんだから。

S—全部一緒になっているんだ。

M—する所ないがね、あんな所で。

N—え、あのそういう下水つていうのはどういう？

M—掛樋「8」つて言うんだね、俺らは。掛樋つて、どぶとは言わな
いんだよね。

S—でも、水はあれですよ、きつと坑内から染み出ている水と
かもそこに流れているんですよ？

M—そうそうそう。そういうのも流れている。で、飲む水は別に
みんな持つて行くわけ。鉱車の中に水を入れたり、パイプで水を
引いたりしているから、そういうのは大丈夫だよ。飲んだり食つ
たり。あとはご飯食うのは電熱器で熱せられるから。坑内の中
が熱いから、パンツ一丁みたいになって仕事をするんだよね。みん
なね、熱いのが分かっているから。こんな長ズボンなんか着ていた
ら、動けないよ体が。

S—汗で多分濡れちゃって動けないですよ、服が。へー。そう

なんだ。

……(省略)……

S—坑内での事故の話も聞くのですが、事故つていうのは知らな
いうちに酸素が無くなっていたとか、そういうことですか？

M—酸素がないんじゃない、ガスを発生するんだよね。ガス
が、ガスで死んだ人もいるし。あとは落盤つてつきものだから
ね。落盤。

N—一番多いのは落盤事故が多いんですか？

M—そうだろうね。落盤は多い。そういう所にあんまり行かない
けれどもね、落盤。

S—そういう、例えば落盤事故とかにあいやすい危険な職種は
あつたんですか？例えば、最前線の進鑿とか。

M—進鑿は進鑿。発破かける専門だから。余計なことやらな
い。絶対に、もう。それで、支柱さんは杵を作るから。水や、鉄管
は水が専門。俺らは線路が専門。だけど、やっぱり頼まれて手
伝うことがあるんだよね。「今日は悪いけれども、手伝ってくれ」
て。それで一人で夜中に坑内に行ったことがあるよ。一人で入つて
行くんだから。一人で坑口から4キロ離れた所に歩いて行つて、
300メートル地下へ、下へ降りて行つて。それで切羽「9」へ行く、
地下へ入って仕事やつてくるのさ。

S—一人で、その暗い所に入つて行くのつて、怖くないですか？

M「怖いと思ったことはないよ、ハハ。怖いと思ったことはないね、それは。ただ、嫌だなんていうのは」「こ、昨日人が死んだんだな」って。そういう所には行きたくないよな。そんな訳でね。」「こ、死んだんだよ。昨日」なんて。そんなのあるよ。

……(省略)……

N「1回こうやって坑内の方からのお話を聞いて、いろいろ想像はするんですけども、やっぱり絶対見てみないと分からないものですよね。そういう地下300メートルの様子っていうのは。」

M「は、経験しないと分からない。あの坑内が、300メートルか、3キロになっちゃうと、地震であるだろう。坑内だと地震じゃなくてね、盤ぶくれ」10。

N「盤ぶくれ？」

M「坑内に座っていると、盤ぶくれの衝撃の風で持ち上がっちゃうの。ボカンと。凄くからね、あれ。」

S「え？じゃあ、座っていると風でフツと、体が上がるっていうことですか？」

M「飛ばされて、線路を引いたやつがみんな壊れちゃうから。ぐちゃぐちゃに。」

N「は。」

M「また仕事をやらなくちゃいけない。」

S「大変だ……。」

M「それと、俺らはもう、「絶対、坑内では口笛を吹いてはいけない」って言うだろう？」

S「それは、どうしてなんですか？」

M「山が怒るって言うんだよね。山が暴れる、って言うんだよね。事故が起きる。何かそういう話は聞いたよね。赤い着物は駄目だとか。」

S「それは、事故の時の赤い毛布を連想するから？」

M「なんでも赤いのがいけないって。口笛は駄目だとかね。響くんだよね。」

S「ふーん。あそこか。坑内の中って静かなんですか？」

M「静かだよ、何にもないよ。」

S「なんにもない。」

M「だけど、閉山後にポンプが調子悪くなると頼まれたんだよ。」「悪いけれど、ポンプ見えてきてくれ」なんて。それで、一人で行って歩いたけれど、何かあの掛樋、どぶね、坑道の脇に水が流れている所。そこを歩いていると、カラカラカラカラ音がする時があるんだよ。そうすると、電気の球、あれが引っかかっている時があるんだよ。カラカラカラカラ。気持ちよくはないね。」

S「ちょっと怖いですよ、ね、なんか。」

M「ああ、「こ、こで人が死んでいるんだよな」って思っても、あんまり気にしない。そういう思いは一杯あるね。」

「お話を聞いて」

S「サクサクと感情的にならずに話してくれた印象。事故の話や、一人で暗い坑内に入って行く所も、誇張せずに淡々と話しつつづけてくれていて、それが余計、実際に仕事をしている人の感覚のように感じた。」

N「坑内の話は迫力があって、まるで異次元の空間が広がっているように感じられ、まさに想像を絶する。熱気、蒸気、爆音、爆風、さらには盤膨れ……。そんな死と隣り合わせの世界での仕事をわかりやすく説明して下さった。」

1 足尾にある主要坑口のひとつである通洞坑の一部を利用して作られた坑内を見学できる市営の観光施設。

2 「坑夫」という言葉はマスコミでは用語言い換えて、「坑員」「坑内作業員」と表記するが、この冊子では現地の方が使ってきた言葉をそのまま掲載している。

3 カンフラ、オランダ語 Kandelarij プリキまたは鉄板製容器に油を入れて、灯心を灯した。村上、前掲書、611頁

4 キップランプ (Cap Lamp) 頭上灯。ヘルメット前面の引掛金具にランプを固定し、灯源との間はゴム管やキャブタイヤでつないだ。灯源は腰のバンドに固定する。村上、前掲書、611頁

5 垂直に開鑿した坑道で、運搬排水を目的にした大立坑を、ケージと呼ばれる稼働屋根と鉄骨構造のエレベーターのようなもので移動する。

6 判座（はんざ）作業員の出入退動を示す就業票。村上、前掲書、614頁

7 改めて一日のタイムスケジュールを伺ってみると次の通り。1:00 坑口に出動し判座をかける。坑内の作業場まで移動する。1:30 作業場に到着し、作業を行う。

8 12:30 作業を終わらせ昼食をとる。13:00 坑口まで移動する。14:00 坑口に到着後、判座をもらって風呂に入って帰宅。

9 掛樋（かけひ）坑道の側溝。村上、前掲書、60頁

10 切羽（きりば）切場、切端とも書く。坑内作業場のこと。金属鉱山研究会編集、「鉱山用語集」、東甲社、1976年、17頁

11 盤ぶくればんぶくれ。坑道の側壁が地圧により歪み、開さく当時の坑道断面にくらべ開さく空間にふくらんでくる状態をいう。側壁崩壊などが発生しやすくなり、坑道保持ばかりではなく保安上大きな問題となる。金属鉱山研究会編集、前掲書、19頁

足尾小話「坑内でのユーモア」

「坑内の人々、見逃しているんだよな。ユーモアがある。いろいろあつたからな。」と振り返る方から、坑内のある場面を教えてくださいな。

M「仕事が始まって坑内に入つて行くと、誰かが「俺なんか風邪気味だ。調子悪い。胃の薬くれ」なんて言つてな。「胃の薬飲むんだ」ってポット持つてくるんだわな。「なんだお前、ここにあるポットに入っている水を飲めばいいのに、それ飲まないんか」なんて聞いて。坑内には、小瀧の方からわざわざ水を引いてあるんだけどね。「いやあ、あれだから、胃冷まして飲んでいるんだよ」なんて言つてその後「薬飲むからその水くれや」ってさ。ハハ、その水で薬飲んでさ、「いやーこれは風邪に効くよ。いべんに直つちゃうな」って言うんで、おかしいと思つていたら、中に酒が入っているんだよ。」

S「えーハハ。水じゃないんですね。」

M「水じゃない、酒だよ。どっか行つた時に飲むんじゃないか、酒持ていっておいで。言わないんだよな、周りから。「後で氣をつけろ」なんて言うんだけれどもな。「言うなよ」なんてな。「係員やみんなに言うな」って。「じゃあ今度俺も持つてきて風邪薬飲むべ」なんて言つて。」

S「ハハ、へ。」

M「だから坑内の中にもデタラメがいったり、頓知が利くんだよな。やつぱり飲んべえはね、なかなか上

手いよ。坑内の中でもわかんないよ、喫飯所だつてさ「あれ、このくらの筒のあれがあつたよな……」なんて言つてな。「あのプラスチックの鉄管みたいなあれ、持つてきてくれや」なんて言つて、開けてみたら一升瓶が入っているんだもの。「あれー」なんて。」

一同「ハハハ。」

M「喫飯所の端っこに隠しておくんだ。「ここなら見つからない」なんて。「あそこ二一升瓶入つてたよ、飲んでたよ」なんて。みんな知恵を出してな。それとて、つかい薬缶があつて、係員が回つてきた時に「何だこれ、何か煮ているのか？」なんて聞かれて。ヤカンで煮ているんだよ、芋煮たりしているんだよな。係員が来て鍋なんてかけていたらわかつちゃうがね。」

S「その見回りに来ている人は監視に来ているんですね？」

M「課長、局長とかああいうのが、ほら、「箇所だけじゃないから、坑内を回つていって「みんないるかな？」と見るんだよ。」「苦労さん」なんて。そういうデタラメやっているから。ヤカン煮た時はお汁粉だとかね。坑外にいた時も「おお、お汁粉だ、お汁粉だ」って言つてな。」

……(省略)……

M「そういう坑内のユーモアな話だとかな「中はこうだったよ」ってわかる組夫の人も今はいいいべ。まず組夫だつて、秋田からも来ているんだから。いろんな人がダーつて来るから仕事で機関場に入つてもわか

らないよ。仕事中にその人たちが「ナンギしているから」って言つていて。「なに？ナンギしている？なんだい？そら？」なんて、九州の人がさ「運転手さんナンギしている」なんて言うんだよ。したら、車ひつかけたりなんかしたんだ。そしたら大変だべつて言うんで、「難儀している」って。でも、その言葉がわからないんだよ。ハハ。」

一同「ハハ……、」

M「で「難儀しているって、なんか困っているんだべ」って、なんとか方言で「生懸命しやべっているんだわ。で、「難儀している」とか、こつちも「ん？はつきり？」って。この言葉が上がつたり下がたりするのも違うし。鉾車のこと秋田では箱と言つて「箱がなんかした」と言つていたから、そういうのがわかんなかったり。」

あとは、どぶのことを、掛樋つて言つたり。その、あればあるんだよ。やつぱり向こうの人らも、向こうにある鉾山で働いてきたんだべでも鉾車のことを箱つたり、「大変だ」と言うのは、「難儀している」と言つたり、「困っている」で良いのに。京都弁みたいなやつとか、そういうのは「何言っているんだよ」って。だけど、聞いているとわかるんだよ、何かあつたつていうのは。だから、「とにかく、そこへ行くか」って。ハハ。そういうあれがね。聞くと秋田の人だつたから。訳を聞いても、いちいち秋田弁で言われても……。

一同「ハハハ……、」

— Q 3 —

杜宅の暮らして、どんな生活だったのですか？

砂畑杜宅跡
国道122号バイパス工事中
昭和48年4月8日
(伊東信撮影)

私たちの職場足尾総合支所の周りには一軒家や中層住宅が建ち並んでいるが、このエリアも平成10年頃までは社宅が並んでいた。当時の写真には、びっしりと黒い屋根の社宅が集まっているが、信じられない程の人の多さが際立っているような印象を受けた。現在でも足尾内の限られた場所ではあるが社宅が残っている。共同浴場、共同水場、共同トイレのことや、役職によつて社宅の造りが異なるなど、町で会う多くの昭和生まれの方は何かしらの思い出や経験を持っていて、社宅暮らしはそんなに昔の話ではないことに気づく。

鶏小屋にみえる

〔2013年11月26日 一夫、妻、志村、中山〕

平成8年から始まる通洞社宅解体まで、社宅暮らしをしていた元坑夫さんに色々な話を聞いてみた。社宅の暮らしの話題になった時に、少しずつ奥さんが話に加わってくれた。

夫―ただ、同じ古河でも炭鉱の社宅の造りと、足尾みたいに面積のない所での銅山社宅の作り方の違いがあるのはわかるね。もしも足尾に広々とした土地があるんだったら、13戸並び9戸並び、6戸並びの建物が連なっているような社宅っていうのはあり得ないよね。だから、閉山後の銅山観光オープン時に他所から訪

れた子供が、わ鉄〔1〕に乗って足尾に見学に来た時に「わー、鶏小屋だ。なんでこんなに鶏小屋があるの?」と不思議がついて話を聞かされた事がありましたね。確かに言われてみれば、子供心にそう映ったのではないでしょうかね。鶏小屋と同じように見えたんだらうね〔2〕。……それだけに貴重な銅山社宅なんだですね。私の様に社宅育ちの者からすると違和感が無いけれど、当時訪れた人たちには心打つものが大きかったと思います。

S―その社宅の様子が珍しかったんですね。
妻―鶏小屋だってね、電車の車窓から見る感じでしょ。まあ、他にもいろいろ社宅が見えますけれども、もう社宅がびっしりあるわけですよ。鶏小屋とかね、もうそれを聞いて私たちも良い気持

ちはしないですよ。そういう話はよく聞きましたよ。

S—そういう話はあったんですか？

妻—そういう風に、鶏小屋のように見ちゃうんですよ、他から来た人たちは。

夫—銅山観光オープンの時は大間々方面に行く途中にね、養鶏場があるんですよ。そうすると、その養鶏場が言われてみれば、社宅のような形で並んでいるのね。だから、初めて足尾に見学に来てわ鉄の車窓から町を見ると、社宅がそう見えちゃったんだろうね。段違いに並んでいるから。

妻—足尾は線路沿いもみんな社宅でしょ、平屋で全部社宅だからそういう風に見えますよね。それに、1棟が長いでしょ。本当に1棟に5軒も6軒も世帯区分されている。私たちが渡良瀬にいた頃は1棟9軒並びに入ったこともあります。それが一番長かったですね。あとは5軒並びとかね。もう4軒とかいろいろですけれども、場所によつてね。狭い所はやっぱり長く作れないから短かったりね。だからね、そのくらいあれですよ。鶏小屋の方が幸せだよ、あんな綺麗な所に住んで。ハハ、酷いでしょ。

夫—そういうふうに、言つたつてね。ショックだけどね。

妻—だつてね、本当ベニヤ板で隣と仕切っている造りで、仕切りごとに家具を置いていてね。隣の声は聞こえるし。隙間風は入るし、フフ。今思えばね、それが懐かしくてね。



昭和28年 中才社宅及び砂畑一部(伊東信撮影)

S—ああ、そうですね。

妻—今のようない般的な一軒家に入っちゃうと、本当ですよ。声は聞こえなくて、ちよつと寂しい感じがしていますよね。昔はね、隣で何かあったり、何かあれしていると声が聞こえたりね、人の話が聞こえたりしますけれども。今はもう、サツシになっちゃうと静かなものです。夏場なら網戸にしていれば聞こえますけれども。ハハ。

「お話を聞いて」

S—最初は旦那さんがお話をしてくれていた中で、社宅の話題になった時に奥さんが話に加わってくれたのが嬉しかったし、印象的だった。女性の方が社宅にいる時間が長いから、より話題があるのかもしれない。鶏小屋と表わされることに「いい気持ちがない」とはつきりしながらも、話しているうちに社宅の賑やかさや不便さに対して、親しみを持って懐かしんでいるようだった。

N—今ではだいぶ少なくなった社宅も過去には町にびつしりと軒を連ねていた。当時の写真やお話からそこにあった生活を想像すると、現代が失ってしまった大切なものがあるように思われる。

夢のような近所付き合い

「2014年1月10日」夫、妻、志村、中川

社宅エリアでの人とのやり取りの様子など、風景が思い浮かぶように自然に話してくれる。一方で、当時の人付き合いなどを話していくと当時と今の生活の違いに気づいていくように話が進んだ。

妻—社宅の中では今日あったことみんな知っていますよ。

S—社宅の皆さんがですか？

妻—「今日こういう事故があった」って、みんな。

S—それは人づてとかで？

夫—もうなんでもすぐわかる。そこらに共同風呂があるから、誰々が入院したとか、誰々がどうしたとかね。あとは、丁度子供を産んだ頃に、親の自分が風邪をひいちゃって子供だけで風呂に入れないから、「誰か連れて行ってくれるけ？」って頼んで「はいはい」って。「誰か子供を風呂に入れてくんねえかな、母ちゃんが風邪ひいてしまっ」って言うとおばさん「はいよ」なんて子供をお風呂に入れてくれた。だから、今考えると夢みたんだな、って。

妻—そういうあれはあるわね。

夫—だから、知っているおばさんが「ああ、任せておけ」って子供



共同水場（伊東信撮影）



S | 現在残る社宅エリアの一角。手前の砂利道にも奥に写る造りと同じ社宅があったのだが、住居者がいないため平成26年に入ってから建て壊された。

を風呂に入れてくれてさ、そしたら違う人が子供を連れて戻してくるんだから。だから風呂に入れてくれる人と、着物着せる人は違うんだ。赤ん坊なんて平気だよな、そのくらいね。

妻「やっぱり楽しかったですよ。あれがね、人との交流がね。

夫「交流がね。」「どうした、どうしたって」「誰々が入院した」とか、どうか。「大変だ」とか。

妻「今、本当に新聞でも読まなくちゃ。

夫「新聞読んで、近所の人何やってるのかわからないんだから。本当にわからないんだから。

妻「市営住宅だつてね、同じ階でも数件の人にしか行き会わないでしょ？」

夫「だから近所の人何やってんかわからない。始めはこんなじゃなかったんだよな。

妻「始めはなんだかんだ。

夫「そのうちだんだんとな。

妻「で、今なんか誰が入院していて、誰が何処に行ったかわからない。まあ都会並になっちゃったのかな？」

夫「ハハ…。

妻「社宅があった時には、もう絶対に鍵なんて閉めないですよ。

夫「そうだね。荷物だつてさ、宅急便とかの荷物が留守だったから「隣置いておきました」だったからね。」「Mさん、いなかったから

隣置いてきたよ」なんてさ。

妻「一言つていた、置いて行っちゃうんだよね。でも今はお隣に「荷物頼んでも良いですよ」って言うけどやってくれない。だから、それだけやっぱり違いがあるんだね。

夫「まあ手が回るから、」「○さんこういんだよ」って、昔はそういう風に「預けてきたよ」なんて言つてね、

妻「干し物なんか、雨降っているとみんな仕舞って、

S「近所の人。あ、確かにそういう、洗濯物のことも…、

夫「そういうんだつたし、なかなか。

S「あ、なんてなんでしょうね。

夫「なんてなんだかな。

妻「今はもう鍵がかかっているから、入って行くこともできない。ね、大変なことになっちゃって。

夫「ピンポン押すと、「誰ですか」なんて。直接来た方が早いって思うんだよね。そうするとさ「誰ですか」なんてやっているから、

「俺だ」なんて。

妻「だから今みんな鍵を閉めていますよ、一人で暮らしている人は。私は鍵を掛けていないけれども。

夫「鍵掛けているんだよね…。

妻「そうして、鍵を二重に掛けている家もあるしね。」「ちよっとお待ちください」って言われて待つてと、

夫―鍵を開けきんない。

S―開けるのが、大変になっちゃうんだ。

夫―それが、最近来た人じゃないんだよな、昔からいる人なんだよな。その人がそうやつてんだからたまげるよな。

妻―「何、お宅鍵を二重に掛けているの？」って。……（省略）

……干し物だつて何だつて雨に濡れたつて構わないって感じだから。

夫―この前も下ずぶ濡れになっちゃつてな。布団なんか取り込んでやりたいけれど、余計なこととして怒られちゃうのよな。大声で「雨降っているぞー」って言つたよ。

S―ハハ。

夫―でかい声出してさ、「いるんけ、いるんけ？」って。

S―へー、本当にそういうことは変わつちやつたんですね。

夫―他の地域でもそうなんかね。

妻―どうだろう。変わつたんかね。わかんないけど。……昔はやつていましたよね、「お茶飲みしよう」って言つてね。

夫―昔は家にあがつていつてな、喧嘩つけんだよな。「わー、あがれ、あがれ」なんて言うのと、すぐ焼酎出してさ、ハハ。危なくてしょうがないから。「一杯だ、一杯だ」なんて言うのが、夕方になると「今日はMちゃんが来たから」って言つてさ、今度は焼酎こんなに入れてさ、「もう、飲んでくれた」って言つてさ、飲んでくれたつて喜んでさ、だからもう……、時代が変わつた。時代が変わつたつて言

うけれども、相当違うよね。人が生きていけば同じなんかもしれないけれどもね、年寄りの人が変わつたなつて思うよね。

妻―でも、あの一人暮らしの人は大変ですね。みんないくらか認知症ができていますね。まあ、私もそういう、通る道になつているんでしょうけれども。

夫―通つているよ。俺は、「おー」なんて言つて電話かけるけれど、こちに來て「あれか、あれか、名前知らねえわ」なんて覚えてなかった。

S―でも他の方も、人との近所付き合いが無くなつたとおしやつていました。それで、一人暮らしの方の孤独死の話になつたのですけれど、たまたま散歩していた時に電気がずつとつけばなしだつたんですね。それで、近所の人に聞いてみても「今朝は見たよ」と言うことだつたけど、ずつと電気はついてた。それで、やっぱりそこのお家の方が亡くなつていたらいいのですけれども。だから、ちよつと声をかけることが出来なくなっているんだなと思つて。……（省略）……

妻―だからね、なるべく声かけるようにしたいんですね。だけれどね、やつぱり年寄りの家に行つて良いんだか、悪いんだか、わからないんだよね。あのお金が無くなつたとかね。そういうのあるからね。

S―あー、そういう風になっちゃうんですね。

夫—お金が無くなっちゃったとかで、そこに置いておいて、忘れちゃったと言っても認知症だから、後であつたなんて言ってもな。

「誰かさんが来たらお金無くなった」って言うのが一番おかしいから。「どうしたよ？」って行けないんだよ。

S—うーん、確かに。

夫—お金、やっぱりボケなんだよな。お金あれしのがわかんなくなっちゃうんだから。「鍵、鍵、鍵」なんて言っ探しちゃうんだから。だから、ね。そういう「あー、あの人はあれかな、あの人はいるのかな、いるんかな？」とか、そういう風にしか思えないだよな。

S—うーん…。

妻—「見たよ」なんて言う人もいるから「あ、じゃあ大丈夫だね」って言うけれど。最近は家を通りかかて、あの人もいるなとかね、

夫—本当にね、考えちゃうと本当に忍びないな。「昔みたいなのがな」って言う人がいるけれど、本当に…。

妻—昔はね、「なんかいたけー」なんて言っ入ってきちゃうの。

S—ハハ、戸を叩かないで？

妻—「いたけー」なんて言っ、「はい！」なんて。そうすると、家の中まであがつてきちゃう。

夫—違うもんな。「母ちゃんいるか？」とかね、そういうんで、ああ。まあ現代のあれにしてつけど、一生懸命喧嘩しないように、

あれしないように。

「お話を聞いて」

S—「夢みたい」な社宅の近所付き合いの話をしながら自然に今へと話が広がった。話し手のお二人も「そういえば、今は違う」と改めて気づいていく感じだった。「昔は近所付き合いが強い」、「時代が変わった」という考え方は知識として知っているつもりだったけれど、この話にある豊かな生活感や人とのやり取りがまるつきり変化して寂しいような、もったいないような、自分はその生活感とは違う所にいるし、戻ること出来ないんだなと感じた。

N—明るく話す話し手のお二人からは、寂しさを強く感じた。同時に、実際の付き合い方が変わってしまったも、近所を想う気持ちは変わらない方々もいるのだと思った。

部屋の広さ

「2014年8月19日」夫、妻、志村、中山、好井

会社の社宅は、役職によって条件の良い所に引っ越しをする仕組み。現在も社宅で暮らすご夫婦に、今までの引っ越し経験などをお伺いする。

Y—社宅の広さってというのはどのくらいなんですか？



露路 砂畑社宅(伊東信撮影)

S | この写真を見たある方が思い出したのは、飼い犬にはスピッツが人気だったこと。(写真に写るのはスピッツ系の雑種かもしれないけれど)閉山直後には、足尾から引っ越した人がやむなく飼い犬を手放すケースが続出し、町には捨てられたスピッツが多かったという証言も。

夫― 広さはね、会社の役職によつて変わりますね。古河さんは。

Y― 社宅の中でもそういう違いがあるんですか？

夫― あるんですよ。最初は6畳、3畳で、6、3畳の部屋の他に
お勝手が2畳ぐらいあつたんですよ。

Y― 6畳と3畳と、お勝手が、

夫― お勝手は2畳です。それが鉦員の最初の社宅なんです。それで、その2畳の所にお勝手があるんですけども、水道は引いてなくて、共同トイレで共同浴場なんです。だから渡良瀬社宅に今でも残っている共同水場と共同浴場があるから、見て行った方が良いでしょう。ここにしかもうないですから「3」。もうここしか残っていないくて、あとは全部壊しちゃったから。社宅は今言ったような6畳3畳の広さの所もあるし、6畳6畳になったりもします。職場での立場が上の方に行くにつれて、変わって行くんですね。鉦員さんから、その次が現場の係員、まあ主任くらいで、その上の会社という、総合職の一番、総合職までいかない下の係長くらいになると、その上になって、副課長になるとまたぐつと上に行つて、で、会社のある程度になつてくると、玄関があつてお風呂場があつてということなんです。だから、私も最初に入った時は、家内とこの6畳3畳の社宅に入ったんですよ。それで、何年か勤めてから、内便所でお勝手も家の中にある社宅に入ることが出来ました。

妻― 2回目の引越し先には水道が入っていましたが、昭和50年頃には社宅もほとんど水道が家の中に引かれていましたね。

夫― それで、部屋の大きさが6畳6畳くらいか。

妻― そのくらい。6畳6畳くらいで、お勝手が3畳くらいです。引越しのたびに、少しずつ大きくなっていくんですよ。

Y― そこはもう水道が入っているんですか？ 家に？

夫― その時は入っていましたね。それでその後はもう内便所のある所で、6畳6畳、4畳半か。それで廊下があつて、まあまあだったんですよ。それでそこにしばらくいて、今の社宅に越したんです。それから今の所にずっと住んでいます。そこはね、8畳6畳、4畳半の、玄関があつてお勝手があつて、お風呂があつて、それに廊下。廊下が結構広いんですよ。4尺廊下だから結構広いんですよ。

妻― 庭があつて。結構庭が良いので満足しています。

Y― あの、掛水倶楽部で公開していますよね。所長の「4」、

夫― 役宅ですね。役宅にも一般管理職から所長宅までですが、あそこは所長、副所長宅、参事宅です。

Y― その落差にすぐびっくりしたんですよ。

夫― そうでしょ、だから課長宅なんかは、重役役宅の前の方にある、一般社宅と違う所は風呂がついているくらいかな？ ただ、屋根が瓦だったりするから向こうの方が立派かなと思うんだけど

ども。ほとんど掛水の方は本社採用の社員のキャリア組の入所なんです。役宅のうち、掛水倶楽部でいくつかを公開していますけれど、女中部屋とかあつてすごいんですよ。あれは古河独特ですよ。

妻― 所長とか、あと会社の付属病院がありましたからその院長。副院長、そして先生たちが入ったので結構広いんですよ。

Y― いやあ、だからね、今の部屋の数とか、仕事のね配置で家が変わつてくるとかもそうなんですけれども、基本的にそれって男性の理屈じゃないですか。で今話を聞くと、家庭会「5」というのもあるということですが、その奥さんたちの中ではそういう差はあつたんですか？

妻― だいたいです。ないですけども、内面では「あそこのお家では、係長だから」「あそこのお家ではヒラだから」というあれはいろいろありましたよね。

Y― そういう話を聞きたい、ハハ。

妻― ハハ、まあ怖い。ハハ、そういうのはありましたけれども、まあ、あまりいざこざとか、今ドラマやなんかでやるようなああいうのはなかったですよ。

夫― 個人差はあるけれども、極端にはないですよ。あそこは課長さんの奥さんだからって多少はあつたけれども、むしろ組合員の奥さんの方が元気よかつたから。

妻― あの、結構活動しましたよね。私たちはね。それで主婦の会つていうのがありまして、労働組合に旦那さんが入っている人が主婦の会の会員になるんです。結構いろんなメーデーとかありますし、閉山の時とかは本社まで交渉に一緒に行ったり。ハチマキをして行ったりしました。

夫― 社宅などでなくて差をつけているかと言うと、一生懸命やらせようとして差をつけているんですよ。一生懸命やれば、

Y― 一目に見えていくわけですね。

夫― そうそう。それで、一般社員さんからだいたい総合職になるのは、本社採用の総合職と、下から上がつてくる総合職では全然違うけれども、下からいったのはせいぜい、いつでも副課長くらい。まあ、運よくいつて課長くらいなんです。だから、あの20代の時に一生懸命やつて30くらいで職員にならないと、遅くなっちゃう訳だね。だからみんな一生懸命やつたと思うよ。そういう会社の仕組みだと思ふよ。

「お話を聞いて」

S― 社宅は外から見ると、実際に中に入ってみるのでは随分印象が違ふ。今回のご夫婦が現在暮らす社宅は、少し高台の場所に立地していて、居間から綺麗な庭も見えてとても住み心地良がさそう。また、銅山の職種（地元採用、本社採用、坑内、坑外）の違いは、いろんな人に聞けば聞くほど、細分化していて同じ銅

山の仕事でも全く違うようなので、全体の組織がどうなっているのかも今後気にしていく必要がある。

N—実家のマンションで「どちらが上の階でどちらが下だ」だと

か「あそこのご主人は官僚で、あそこはこの会社の重役だ」といった噂があることを、ふと思い出した。ある意味どこの世界もそこは同じなのかなと思った。

1 旧国鉄足尾線のこと。群馬の桐生駅から足尾の間藤駅まで繋がっている鉄道だが、昭和62（1987）年の国鉄民営化の影響で、足尾線も廃止の対象となり、それを阻止するための乗車運動が展開された。2年間の東日本鉄道会社による運行を経て、平成元（1989）年からわたらせ渓谷鐵道として運行している。

2 他の方からも、社宅を鶏小屋と言いつわられていたと聞く。一方で、足尾に住んでいる一部の人はハニモ二カ長屋とも呼んでいた。

3 この時、現在残っている共同浴場、共同水場を案内してもらう。当時のままに残っているのは渡良瀬だけ。現在も住居として利用されているため、一般の見学はでない。

4 掛水倶楽部に隣接する役宅。

5 労働組合員の奥さんの集まり。

— Q 4 —

戦時中、外国の人とどんなやり取りがありましたか？



中国人殉難烈士慰霊塔除幕式 式典のようす | 昭和48(1973)年7月30日(新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵)

聞き取りでは、戦時中の暮らしについて尋ねることが定着してきた。特に聞き入ってしまうのは、外国人捕虜、朝鮮人労働者、進駐軍と足尾の人たちとの関わりの話。例えば、小滝坑エリアには造りが異なる中国人慰霊塔と朝鮮人供養塔がある「1」。が、私たちは中国や朝鮮の方と足尾がどのように関係していたのかも最初は知らなかった。慰霊塔を見て初めて当時足尾に来ることになった人たちの存在を認識し、聞かせてもらった当時のやり取りから、戦争の影響により足尾に来ることになってしまった人たちについて想像するようになった。まだ、日本に来ることになった方の視点は圧倒的に足りないが、今後聞いていきたい。

イモとコッペパンを交換

〔2014年4月15日―M、志村、中山〕

第2次世界大戦中に学生だった方の当時の記憶。農家だったので一般家庭よりも食糧に困らなかったため、食料を分けるやり取りがあったようだ。

M―今の高等学校のグラウンド跡や、砂畑の橋を渡った所の左側に砂畑の寮みたいな所ありますよね、あそこに白人捕虜収容所があったんです「2」。あと、かじか荘に行く途中に小滝の里がありますよね、あそこちやうと行った場所に斜め左の所に沢があるのですが、そこにも中国人が収容されていた「3」。あとは、本山

坑など何箇所か分かれてね、選鉱でも働いていたんですよ。みんな中国人とか、今の韓国ですか、朝鮮人もああいいうのも戦争の流れで働きに來たり、鉱石のああいいうのを、

S―分別したり？

M―選鉱なんかをね「4」。だからあの頃、砂畑あたりは朝鮮人の人たちの家族がいて食べ物がないから、神子内まで野菜をとりにきましたよ。

S―買いに來たつてことですか？

M―そう、お母さんは子供を腰にくくりつけてくる。日本は背負うでしょ？向こうは腰につけるんだよね、綿をちよつと出して。

S―じゃあ、ちよつと違つていうのが見た目でわかるんですね。

M—私の家にも食糧を求めて来ましたよ。日本語が上手な人がいましたけれども。それと、そこらへんに生える草があつてね。それを食べられると知っているから、みんな摘んでね。それでノノヒロツて知っていますか？ らっきようみたいなのがなっている草です。「それ採っちゃ駄目だぞ」って言うんだけど、みんなむしつて盗んで行く。でもね、黙つていたけれども子供だからね、「採るなよ」って言つたら採らないかなと思つたら採るので、石なんか投げたことあるね。

S—ああ、そうですね。

N—あの戦争中、戦前も戦後も含めて、やっぱりみんなが食糧難だつたじゃないですか。その中でも、特に外国人の人は日本人よりも食べられなかった？

M—食べられなかったですね。日本人は、良い人は特別にいるんだけど、悪い人もいるから。その頃はあの、野路又のグラウンドの所に収容所がありまして、珍しいから当時子供だった私は、その囲いがしてある収容所に行つたんですよ。そしたらその柵越しに収容されていた人と話したんです。その方が「私は、中国人で収容されている者のんだけど、あのイモが食いたい」と言うんですよ。「サツマイモとか、そういうのを食べたいんだけど、も、あなたの所にありますか？」と聞かれたので、家に買い出して買つたサツマイモが少しはあつたから、「ある」と言つたので、

うちのお母さんにそのことを話したら、「気の毒だから、持つて行つてあげろ」って言うから、昔の鞆にサツマイモを入れてさ、1貫目「**5**」くらい収容所を持つて行つて同じように柵の所で会つて、渡したもん。そしたらその人が「ありがたい。ありがとうございます、ちよつと待つていてください」って油パン。

N—油パン？

M—油パン、コッペパンっていうのかな、同じ。パンを油で揚げるんですよ、それをくれましたよ。

N—へー、なんか温かい話ですね。

M—そんで「お金なんだけれども、これ」って、竜がついているお金を1枚か2枚くれました。それでパンは12、3個くれましたよ。

N—へー、そんなに。

M—沢山貰つて帰りましたよ。「ああ、ああいう人がいるんだな、ああいう所に入つてきてかわいそうだな」と思った。あとはその、日本人で親切な人がいたんですよ。砂畑の人で親切で、帰りに自分の食べ物残つたものをあげたみたいです。連合軍、オーストラリアの人とかそういう人にもくれたみたいです。それで、終戦になった時に、連合軍の飛行機が飛んできて、タバコとかそういうのを落としたんですよ「**6**」。捕虜の人に落として行つたわけ。それで、捕虜の人たちはそれを貰つたら、「世話になった」って良くしてくれた人にタバコとか何やらを分けたんだよね。

「お話を聞いて」

S 一戦後直ぐにバラシユートで捕虜の人たちに嗜好品が落とされたという話は、他の方からも聞くことができ、戦後の一つの共通する風景だったようだ。また、別の複数の方から、捕虜の方に對して親切にした、酷い扱いをした話も聞くが、それらの場面が話題に出た時に、どう反応しているのか分らずとにかく聞き入ってしまふ。

N 一戦時中や戦後、また外国人捕虜や朝鮮人労働者の話を、実際に経験した方々から、足尾に來たことで、人生で初めて何うことができた。様々な意見や見解があり、議論が尽きないテーマではあるが、少なくとも、語られるそれぞれの事実を知ろうとする努力が今の若者に必要なのじゃないかと、若者なりに感じた。

豊かな知恵を教えてもらう

「2014年7月 夫、妻、志村、中山」

戦時中の暮らしを教えてもらうために、小学生だった当時の食糧事情について尋ねた。朝鮮の方とのやり取りの話になる。

S 一やっぱり戦時中もだけれども、戦後でも大変な時期が続いたんですよ？

夫 一合の米にさ、水を10倍、一升入れてさ、ドロドロにして。

S 一あー、おかゆとも言えない感じの？

夫 一そこに今度はイモ、サツマイモのあれを入れてさ、で塩を入れて、それですすって食ったんだから。

S 一あー、そうなんですね。へー。

夫 一で、俺の弟なんてみんな栄養失調で死んだんだから。

N 一あ、そうですか。

夫 一母親が死んじゃったろ、ミルクは買えない、母親がいらないからおっぱいも飲めないから。うん。で牛乳だって、ここらだと横根山「7」の牧場まで買いに行っただけだよね。何回か行っただけだよね。

S 一歩いてですよ？

夫 一歩いてだよ。赤ん坊に飲ませるために。母親が子供を産んで、すぐ死んじゃったからね。「子供には牛乳が良い」って言っていたんだけど、やっぱりね、赤ちゃんには牛乳は良くないんだよね。今はそういう風にわかるんだけど、昔はねそんな風に知識がないがね。牛乳飲ましたらみんな下痢しちゃう。腸を悪くしちゃうからね。だから結局重湯、米のない時代に重湯の上澄みを砂糖入れて飲まして、だから栄養失調になっちゃうがね。今なら、ビタミンが栄養だって、みんな認識したけれども、昔はビタミンもミネラルもそんなの分からないがね。とにかく腹きつくなければ大丈夫だろう、どうにかなるだろうっていう頭だったから。

……(省略)……

夫—だから、戦後はタンパク質が摂れないがね。肉と豚肉とかそういうのがないから。結局ネズミ獲って、ネズミを料理して食う人もいるし。

S—ネズミ？

夫—蛇を捕まえて蛇を料理して食べるとかね。

S—そんなことしてやったんですね。

夫—千葉県とかそういうところの農家へ行くとき、栃木県もそうだけども。農家に行けばカエルとかいろいろいるけどさ。俺そういう農家っていうの知らないから、足尾っていうのはそういう知識が無いがね。見ればハゲ山で、ススキかスッカンボ〔8〕しか生えていないようなね、痩せた土地だから。結構、ネズミとか蛇はいっぱいいるからね。蛇を捕まえたりさ。

S—ネズミを食べるっていうのは初めて聞きました。

夫—ネズミ食べたよ、食べなくちゃ。それもやっぱり食べる知恵を教えてくれたのは朝鮮人なんだよ。

S—そうなんですか？

夫—結局強制労働で足尾は随分朝鮮人がいたから、うちの隣も朝鮮人の家族だったけれどもみんな教えてくれたから。うん、「生きていくんだったら、タンパク質が必要だよ」て。当時はタンパク質なんてそんな言葉は使わなくても「食わなくちゃ駄

目だよ」って。うん。早く言えば、生物。「生き物を食べなくちゃならないべ」って言われた。「生きているもの食べなくちゃ、生きていけないんだから」って。

S—ちなみに、ネズミって捕まえて、皮とかとってどうしたんですか？

夫—結構美味しいんだよ。

S—切って？

夫—骨だってカラカラに焼いて、美味しいんだよ。

N—俺、結構なんでも食べたことあるんですけど、ネズミはないです。

夫—ハハハ。

N—俺、犬もウサギも蛇も食べたことあるんですよ、カエルもある。夫—カエルは美味しいんだ。だから終戦、昭和21、22年頃っていうと、みんな舟石〔9〕行くと結構野生のウサギが一杯いたんだよ。そういうのを仕掛けて獲ってきて食べたりしてね、うん。

「お話を聞いて」

S—「朝鮮の人が教えてくれたんだから」と、改めて感心しながら話してくれたのが印象的。そして、その時にやり取りした相手の朝鮮の方がどんな人なのか知れたくなった。

N—外国人に対する印象も人によって違うのだと思う。この方のように近くに住んでいた朝鮮の人から知恵を得た方もいれば、あまり外国人と接したことがなかった方もいるのだと思う。

ただ、今回のような異なる文化を尊重する態度は学ぶところが多い気がした。

近所の人や進駐軍との交流

〔2014年7月7日 夫、妻、志村、中山〕

小学生だった頃に丁度戦争になり、鉄道を使って食料の買い出しをしていたという方のお話。子供目線で様々な場面を見ていたことがわかる。

夫—だからこちらの人でもほら、朝鮮人の人が砂畑に住んでいたろ。俺は朝鮮人の子供らの友だちん所にしよちゅう遊びに行きたから。同級生で、「お前の家に遊びに行くど」なんて言ってさ。すると瓶から食べ物を出すんだよ。

S—え？瓶から？

夫—瓶。瓶からさあ、今でいいばあねだね。

N—キムチみたいいな？

夫—ああいうところに漬けておくんだね。「うまいの食わせっから」て言くと、今でいうキムチなんだよな。ああいうのを出してくれたり。「お前の家、瓶一杯あるな」てやっていたんだから。

S—あー、なるほどね。瓶ごと引越して来たんだ。

夫—うん。こういう小さい瓶なんてあつたんだよ。それで、一回

火事があつて大変だつて友だちの家に飛んで行ったらさ、そうしたら瓶を渡してよこすんだよ。「出してくれっ」て。

S—え、瓶を？

夫—ハハ。瓶とかね。棚みたいな家財道具じゃないんだよね。そういうの中にも、衣類だつてちゃんと箱に入っているんだよ。だから出してくれて。もう壺で持ちやすいものになっているんだよね。あの、だからほら、ああいう朝鮮はほら、あつちが攻めて来たり、こつちが攻めて、何が来つか分からないんだつてね。だから、本当に、パーってやつて持つてやつて。

S—あ、すぐに逃げられるように？

夫—逃げられるものを壺にしまっておくんだつて、後で聞いたらね。だから火事の時には壺を渡して「とにかくこれ出してくれ、おつ欠くな」なんて言つて。

S—瓶をこつやつて、バケツリレーみたいにな？

夫—渡しながら中身の音を聞いて「金じゃねえなあ」なんてね。火事で2、3軒燃えちゃったんだけど、お母さん、お婆さんらに「なんか持つて行つてあげられるものないけ？」て聞いて「ほら、これとこれ持つて行つてやれ」なんてさ、やつぱり持つて行つたことあつたよ。「ありがとう」なんてさ。……（省略）……それで、その子が朝鮮に帰る時に家に来てね「お礼に来た」つてさ。だけど中には朝鮮をいじめた人はさ、足尾から先に逃げちゃうんだよ



S | 白人捕虜収容所跡地周辺の現在の様子。"[米国立公文書所蔵資料]に記録されている野路又の捕虜収容所の資料には、『1943年11月10日、東京捕虜収容所第8分所として、栃木県上都賀郡足尾町野路又に開設。1945年8月、第9分所と改称。9月閉鎖。使役企業は古河鉱業足尾鉱業所。捕虜はトラックで製錬所に通って作業に従事した。終戦時収容人数245人(米210,英32,他3)、収容中の死者24人。』と記されています。”(大吉利一郎、『足尾町野路又にロマンを求めて』、栗野印刷、2013年、78頁)

ね、ほらいじめられたから、「あの野郎」なんつてね。でもわざわざ、「もうそろそろ、朝鮮に帰るから」なんて言て「あれしくてください」なんて来てくれた。「子供らと遊んでくれてありがとう」なんて来てくれて。だから懐かしかったよね。

S — その帰ったつていうのは、終戦後すぐつてことですか？ それとも、月日が経つてから？

夫 — 終戦すぐだね、もう暴動みたいなの起きて、あれしちゃつてしょうがないんで、あれが来たんだよね、アメリカ人。アメリカ軍隊が。小学校に泊まって鎮圧していったんだよね。外国人捕虜などの人たちが暴れ回ったんだよね¹⁰。だからもう逃げたり、それでそのうち、ほら、朝鮮系とあれとで押さえたり何なりして。だからほら、当時外国人を使っていた人たちはみんな逃げちやつたんだよね。ほら、坑内あたりで、「この野郎、ふざけんな」なんて言て使っていた奴は逃げちやつた人がいるんだよ、いっぱい。はじめた奴は、

S — 何されるか分からないから。

夫 — 一だけどやつぱり仲良くタバコなんて目の前でババつてふかしてさ、ベツて置いて「じゃあな」なんて言て。そうやって吸わしてやつた、そういった奴なんかは今度は帰る時に逆にお礼に来ているんだよね。「お世話になった、班長さん」つて。班長さんつて言うんだよね。「班長さんにいろいろお世話になった、班長さん優しかったから」つて来てね。家の親父の所とかに来てさ、だから終戦になつ

て、その暴動が起きてちよつと収まってもう帰るつて頃になつたらね。もう、びつくりしたんだけど、豚でもなんでもぶつ殺しちゃうんだよね。牛までぶつ殺しちゃうんだから。バケツ山盛りに「肉持ってきたよ」なんて持ってくるんだから。ハハ。

S — へー、凄いですよね、ごちそうですよ。

夫 — 「班長さん」なんて言つてさ、「肉持ってきたから」なんてさ。「犬じゃなかンべな」つて言つと「豚殺したから」なんて言つて。ああいう、みんな長屋で豚でもなんでも殺しちゃつて食っちゃうんだもんね。だからそういうの言われて、「見に行くんべ」つて言つて見に行ったこともあるもん。ハハ。見てみると上手いんだよね。豚なんか、バーつとネットかけて、こんな変な道具でバリバリバリバリ毛とつちやつてね。

N — 動物を飼っていたんですか？

S — 屠場があつたのかな？

夫 — いや、買い出しかなんかに行つて、ああいう所から買つてきたり。あれしたんじゃないかな。そんな屠殺場でもないんだよね。

……（省略）……

S — それと、終戦直後に外国人捕虜収容所に嗜好品が詰まったパラスユートが降ろされたと聞いたんですけれども、ご記憶ありますか？

夫 — ほら、飛行機がどんどんどんどん来たから。で、落下傘で。

妻—みんな落つことす。

S—タバコとかそういうの？

夫—落下傘で。

妻—私もね、家の近くに落つことしたんで、取りに行つたことあるの。ちいちゃい時に。そうすると知らないから開けちゃうのね、中にチヨコレートがあった。

夫—そういうパラシュートで荷物が砂畑とかにね、パーつて落とすだろ。それで目的地に落ちればいいけれども、こっちの方に落つちっちゃったりするんだよ。そうすると収容所の管理の人が「駄目だ」って言われつけど、後になって「探してくれっか？」って言うって探してくんのさ。

S—どのくらいの大きさなんですか？

妻—そんな、あんまり大きくなかったよ。

夫—落つことす時はこんなでかい箱で落つことすんだよ。

妻—私が覚えているのは小さいの。

S—で、パカつて開けると中にチヨコがいっぱい？

妻—チヨコ、チヨコがいっぱい。

夫—だからでかい飛行機で来るんだよ、大っきい。で、ワーッと来て落とつと落つちるんだよね。そうすると、目的地に落つちらないで風で流れちゃったりすると、山の中に落つちっちゃうんだよ、ダーンって。そうすると凄いだよ取りに行くのが。「お前に行

てくれ、取りに行つてこい、手伝つてくれ」って言われて探しに行つた。で貰つてきたことある。だから落下傘の生地やなんかも「みんなのいんないから、みんな持つて行け」って、みんな生地を切つてくれるのさ。凄い生地なんだよな。だから「リュックサックにする」と良い」って言つてみんな、同じ様な色のリュックサックを背負つてな、ハハ。笑つたんだよ。

S—へー、そんなこともあったんですね、面白い。

夫—布をくれたんだよ、お礼に。「持つて行くか」って聞いて切つてくれて。だから進駐軍が来た時はもうそこであれしていたから、おいらの所こうやつて呼んでさ、その時初めてソフトボールとかさ、一緒にやるべつて言つてさ。

S—え、進駐軍がですか？

夫—うん、あの時「ああ、ソフトボールっていうのはこういうのなんだな」ってさ、ほら野球じゃないんだって。こんなにでっかいボール持つてきて、進駐軍が「野球知っているか、やったことある？」って言つて。「ソフトボール」って英語で言つて、「一緒にやったことある。そしてお礼にチヨコとかをくれた。で「貰つて良いのか、先生？」って先生に聞いたら「貰つて良い」って言うんで。で、学校に年中遊びに行くときさ、ソフトボールとかやらせんの。ボクシングとかさ、あれ2、3回やるとへたばつてさ。ハハ。だから進駐軍が来た時にはみんな面白いことやったり、一緒に色んなことやったりして和や

かだったの。でも先生はなんか「あんまり貰わないでくれ」とか
なんとか言ったけれども、「仲良くするんならいいよな、しょうが
ないよな」って言ったの。だから遊びにいったよ、年中。進駐軍の
あそこ、学校へね。

「お話を聞いて」

S 一少し違う家の中の壺に気づいたり、パラシュートを探しに行
く楽しさなど、子供目線だからこそその感覚。背の高い毛むくじや

らの進駐軍に驚いたとも言っていた。ネガティブな要素だけでは
なくて、純粋な変化に応じて新しい人や文化に入り込んでいく
明るさも凄いと改めて思った。

N 一戦後の進駐軍と日本人との関係についての話は特に興味深
かった。欧米人に初めて接する子供は、大人よりも無邪気に交
流することが出来たのだと思う。異文化とふれあうこととなっ
た当時の興奮が話し手の語りから伝わってきた。

1 小滝坑エリアには中国人捕虜収容所興亜寮¹跡と、朝鮮人供養塔専念寺小滝説教所跡がある。

2 野路又の白人捕虜収容所には245人、砂畑の白人捕虜収容所には213人が収容されていた。参考…米国立公文書館所蔵資料。

3 興亜寮と呼ばれた中国人捕虜収容所には257名の人が収容され小滝坑内外で働いていた。

4 昭和(一〇)年九月当時の足尾の従業員は、職員四六八、鉱員四六八七、臨時鉱員一四四、計六五九六名で、全部日本人でしめられたが、昭和一五年から朝鮮人労働者がおもに坑内
の運搬夫として使われ、一七年からは、勤労報国隊や学徒動員の人たちが選鉱製煉を中心にとり入ってきた。村上前編、『足尾銅山労働運動史』(足尾銅山労働組合、1958年、178頁)
5 3.1キログラム

6 足尾の複数の方から聞く話。資料でも、砂畑と野路又の白人俘虜収容所の屋根には、白ペンキで「P・W」マークが描かれ、せまい山あいを縫ってアメリカの飛行機が急降下し医料品や
食糧などを落下傘で投下して、つい先ごろまで「足尾は山の中にあるから、爆撃したくても山にぶつかってしまうので、絶対空襲はうけない」と安心して足尾町民の度きもを抜いた。村
上、前掲書、『足尾銅山労働史』(189頁)などの記述がある。

7 足尾と鹿沼の間にある高原地帯、開拓農家などがあつた。

8 イタドリのこと。

9 備前桶山の中腹の本山と銀山平の中間地に位置するエリア。

10 戦後の暴動に関しては、各証言や先行研究で様々な説明がある。足尾の方から聞く話では、戦時中酷い扱いを受けていた労働者が、終戦直後に意地悪をした人を探しまわったとい
う内容。資料では、帰国の促進を求めるデモ行進や補償要求の交渉などが行われ、それらを暴動とされることがあつた。参考…村上、前掲書『足尾銅山労働史』(189頁)。
史。古庄正「足尾銅山朝鮮人強制連行と戦後処理」駒澤大学経済学会『経済学論集』第26巻第4号、平成7年3月。

— Q 5 —

キラキラした石、見つけたのですが……



協力隊が足尾で拾った鉱石のかけら。

足尾に来たばかりの頃、鉱物の置物が観光施設や商店などに飾られていて、それなりに銅山らしさを感じていた。しかし、予想を上回ったのが各家庭に置かれる鉱物の有様。「友だちに貰った」「昔集めたのを持っている」「何処の家にもあるがね」など、いろいろな方法で手に入ったらしく、どここの家庭にもと言っているほど何らかの鉱物は見かけるし、庭先に放置されている(転がっている)ことも……。よそ者にとっては感激してしまうのに、「そういえば、家にもあるよ」と棚に埃まみれになって忘れ去られていた水晶の塊を見せられると、今でも山道などで拾えるピカピカした石(水晶などが混ざった鉱物の破片)を見つけて喜ぶ自分が恥ずかしいような、大人げない気持ちになる。

鉱石のような菓子

〔2013年7月11日〕一兄、弟、志村、中山

昭和30年代に小滝で幼少期を過ごしたこちらのご兄弟は、トロコ遊びや、町の様子など楽しい話題で盛り上がる。鉱物の方も、「そういえば……」ということで一瞬思い出してもらった。

S 一足尾の人のお話を伺うと、綺麗な鉱物を家の中に飾っていたという話を聞くのですが、そういうご記憶はありますか？例えばこういうの拾ったんですけど。〔1〕

兄 一もの凄く、いっぱいありましたよね。こんなどこにでもありました。

S 一あー、そうなんだ。

兄 一黄銅鉱とか磁鉄鉱とか、もつとキラキラしているものとか。今言ったように、水晶とか六方石とか。引越しの時に全部捨てちゃったけれども。握りこぶしくらいの塊とか、大きいのだとリックサックくらいい塊とか。六方石とかを、床の間の飾りもんにしていました。

N 一いいなあ。

弟 一確かに床の間にてっかいの、あつたような気がするんですよ。確かに床の間にいっぱいあつた記憶があります。水晶だな、きつとね。ポボポボって白い刺がさ。小さいながらも立派だなと思っただけれども、どこ行っちゃったんだろうね。ハハ。

兄「「こんなもん」なんて感じて。鉄鉱石とかね、金色の、石の部分が無いんだから。100パーセント鉱石。

弟「綺麗だな」と思うけれども、それほど値打ちがあるとは思わないから。

S「それが普通だったんですよ。」

弟「多分持ち出し禁止だったんだろうな、今思えばね。それ親父なんか持ってきて、どこの家にもあったからな。ハハ。こんなでかい、家の中に入らないだろうけれども、

兄「だから駄目だと言いながら、堂々と持ってきていたんだろうな。本当にどこの家にもありましたよ。」

弟「あとは、足尾のお菓子屋さんでもそういうお菓子を作っていたもんね？鉄鉱石の形をした砂糖の塊(54頁参考)。本当にお菓子だか石だか分からないくらいなの。六方石みたいなのと、

兄「緑色のとか。」

弟「確かに、あのお菓子もどこで売っていたんだろうな。」

兄「間違いないあった。」

S「それは飴ですか？」

兄「板菓子、砂糖の固まった、板になっていて。」

弟「でもたぶん甘いだけなのかな？ハハ。」

S「よく食べていたんですか？」

兄「たまにお土産とかで貰って食べていましたよ。丁度なんだろう、

う、氷砂糖のようなものですね。」

弟「そうだ、氷砂糖だ。硬かったものね。」

N「他に足尾で作っていた製品というか、今は無くなっちゃったけどな、っていうお菓子とかありますか？」

兄「足尾は何もないんだよね、

弟「何もないんだよね、そう言う寂しくなっちゃうけれども。」

「お話を聞いて」

S「全体の話の中では鉱物の話題は一瞬だけだったけれども、確かに記憶にある(そういえばねという感じで)。私の見つけた鉱石のクズは、本当に「こんなもん」で、とても敵わない。ちなみに、鉱物のお菓子は残っていないが、現在の足尾ではあんこ玉や足字銭最中がある。」

N「鉱石を引っ越しの時に捨ててしまったということに驚いた。よそ者からすると「もったいない！」と思ってしまいが、足尾では人によつては「ありふれている」もので、そこまで固執しなかったのかなと思う。」

喫飯所で鉱石を洗う

「2014年3月5日 夫妻 志村、中山」

社宅暮らしの話題の合間に、すかさず鉱物について聞いてみる。すると、別の部屋から鉱物を持って来てくれた。



鉱石菓子 銅の花 包装紙 (提供: 安塚菓子店)

S | 当時のお菓子の説明文には、「銅の花は足尾銅山から産出する鉱石を表現した砂糖菓子で真に鉱石を思わせる足尾の代表的な御土産品であります。銅山の主要鉱石の黄銅鉱とそれに伴って産する石英(六方石、水晶)方解石などを配して形どった作品であり、原料には砂糖菓子と白ざらめを使って加工したものであります。……お召し上がるときは、よく破碎していただき足尾の話でもしていただければ幸いに存じます」と記されている。お店の方の記憶では、昭和30年代から閉山時には確実に販売されていたが、いつしか作らなくなってしまったとのこと。

夫 一 何の鉱石だつてき、もう良い鉱石なんてみんな持って行つたんだよ。鉱物を家に飾っていた人が一杯いたんだよ。そして、飲み代にみんな売っちゃったとか、家にも親父が持ってきたでかい、こんなウワーってのがあつたんだから。だけど、「飲み代にしちゃうべ」なんて言つて、ハハ。「また拾うから」なんて言つて。だから一番持つて行つたのは、他から出稼ぎに来ていた……、

N 一 組ですよね。

夫 一 ○組が来たもんだろ、その親方さんがそういう鉱物が好きだから買ったんだよね。

N 一 買った？

夫 一 閉山の前にもうほら、「あそこに酒代に持つてけよ」なんて、初めはおじさん、「いやー、俺が買うから」なんて言つたぞ。

S 一 その鉱物をですか？

夫 一 鉱石。だから、そこが今どういう風になっているんだか知らないけれども、みんな。

N 一 ○組さんはもういいですよ、

夫 一 いいないない。飲み代に持つて行つたんだよね。

……（省略）……

S 一 へー、でもそこで集まった鉱物が、どつかにあるんですかね。お仕事していた時に、綺麗な鉱物とか見つけたりしたんですか？

夫 一 うちらの仕事は坑内じゃないから。だから手のひらくらいのなら、持つて来て箱に入れて飾つておいて置いておいたよ。

S 一 あー、そんな話羨ましい。良いな。足尾に来てから、鉱物があることにびっくりしたんです。

夫 一 うん、だから、棚のどこかに入っているかもしれない。だから、ああいふ所に、一つくらいポツンと置いてあるんだよね。（本当に、居間の戸棚に入っている）

N 一 あ、本当だ。

夫 一 昔、貰つてきて。

S 一 本当だ、黄銅鉱と、なんか銀色のもまじっていますね。

夫 一 そんなの、もう本当に普通だね。みんな喫飯所では凄いのを持つて来て、水場でキヤッキヤッキヤつて磨いてさ。水場に置いておくとさ、鉱石が無くなっちゃうんだよ。ハハ。

S 一 へー、誰か持つてっちゃうんですか？

夫 一 「お前、また誰か持つてつちやつたな」なんて言うとき、「いいや、また良いの見つけてくらあ」なんて。初めはもう閉山が決まったら、みんな「記念に持つて行くんだ」って、そういう。初めはそんな鉱物に振り向きもしないで。

……（省略）……

S 一 それで、一つ質問があつて。その、坑内からおつきな石を運んできたなら、バレないかなと思つたんですけれども、

夫―バレちゃうがね。だから面白いんだね。ほら、組夫でもなんでもさ、「持つて行けないから、ここに置いてくよ」って言って喫飯所に行くでしょ。「持つて行けないから、〇さんここに置いてくよ」って。ここに置くんだよ、夜番だと帰っちゃうがね、「明日、置いててくからな」って言うのと無くなっちゃうのさ。そうすると「〇、誰が持つていったんだろうな」なんて、「あの野郎、きつとあの人しかいねえ」なんて言って、そこに置いてあるの。そうすると、「貴様この野郎」って、なるんだよね。

S―ハハ、そういうことになるんだ。

夫―うん、「貴様、この野郎」って指差されるんだよね。「坑内にあるうちは古河のモノなんだけれども、外に行くと俺のモノだわ」なんて言ってる。「この野郎」なんて喧嘩になって。

S―そうなんです。喫飯所では、どんな風に鉋物が置かれていたんですか？

夫―支柱さんとか、車夫さんとかが休む場所があるんだよね。仕事して、ご飯食べたり。そうすると「おう」って言って入って行くわけさ、「飯だ」なんて言って、すると水場があつてそこに飾ってあんのさ。

S―飾つてあるんだ。へー。見てみたかったな、そういうの。

妻―ハハ。

S―どういう風になつていたんだろう、喫飯所の中に置かれてい

るというのは。

夫―「いいな」ってなるがね。「いいんじゃないかな」なんて言って水で洗つて飾つておくんだわな。だから、手のひらくらいの鉋物はもう本当に。

S―いっぱい？

夫―めずらしくないから、持つて行かないんだよね。

S―あ、当たり前だから？

夫―当たり前だから、「うん、まあまあだな」なんて置いて行くがね。「おう、これ貰うぞ」なんて言うのと、「ああ、持つてけ」ってそういうんで。だから、手のひらくらいの石、あそこで横になつて埃だらけになつていられるけれども、詰めて、木箱作つて置いておいてね。

妻―でも閉山後、みかん箱つて、リンゴ箱とかの木箱つてあるでしよ、木の。それに鉋石が一杯あつたの。

S―あ、その、いろんな綺麗な鉋物がですか？

妻―うん、閉山までは、家にリンゴ箱2つくらい鉋物があつたの。そしてね、どつから学生が来るの。研究だとか、何とか言つて。みんなやつちゃうの。

夫―ほら、もう引越すんでさ、そんな重いもの持つて歩けないから。

妻―で、「この家に行けば、あるかもしれない」って、誰かが教えたんだよ。

S — あ、いろいろな人から聞いて？

夫 — 「鉱石とかなんとか見たいんですけれども」なんて言うがね、そうすると「ああ、向こうに行ってみる」なんて言ってる。○さんの家って聞いて来たんだよ」って。そのうち、鉱物を見て「これはあれだね」なんて言いながら見ていくんだ。で、「一つ貰えますか？」って聞いたら「ああ良いよ」って。

S — へー。えっ、でもそういう人たちがいたんですね。

妻 — いた、学生さん。

夫 — 大学生、中にはね良い石があったみたいなんだよね。小ぢやな石でもね「これください。なんとか石って貴重なんです」って、

S — じゃあ、石の研究している学生が来たんですか？

夫 — 随分来たな。

S — へー、そういうの想像がつくというか。なるほど、そういうこともあるのか。

妻 — 一で、みんなやっちゃうんだよ。

N — 高く売りつけてやれば良かったのに。

一同 — ハハハ。

夫 — その机の横に埃を被っている石はね、ただ遊びで集めたりなんかしたから。だから坑内の人は良いのが採れたんじゃないかな。坑内に入っていたから。うちらはほとんど遊びに行ってる。「おう」「あ、これ貰うぞ」って貰ってる。だんだん増えるって「じゃあ箱作って入れるかな」ってこうやっておく。良いのがあったら兄貴に送ってやったり。

「お話を聞いて」

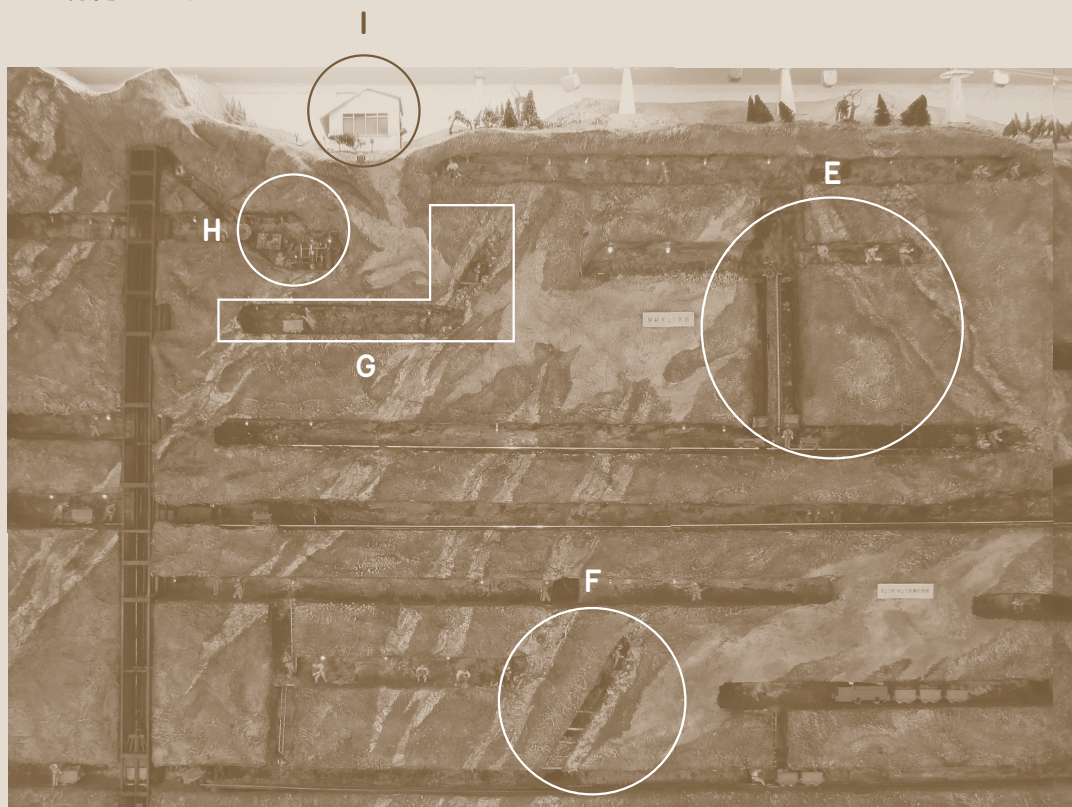
S — 閉山後の石の買い占め、誰かが貰って行ったという部分。鉱物に限らないことだが、気にしない現地の人感覚と、他所から目線の珍しさが合ったり、持ち去られたことがよくわかる。私も否定する気持ちはないけれども、なんか腑に落ちない気がする。今更しようがないけれど。

N — キラキラ光る鉱石は、坑内で働く坑夫さんたちにとつての楽しみでもあったし、もしかすると励みにもなっていたのかなと想像した。記念に飾ったり、飲み代にしたり。きつと光る鉱石を見つけたときはとても興奮し、嬉しくなったのだと思う。

1 備前橋山の山道などでは、赤茶色がかっていたり、水晶の破片が混ざっているような鉱石の破片が落ちていたことがある。51頁の写真のような鉱石を割ると、黄銅鉱物や水晶が入っていることもある。



坑内のしくみ



足尾銅山観光内・坑道模型コントロール・マシンより

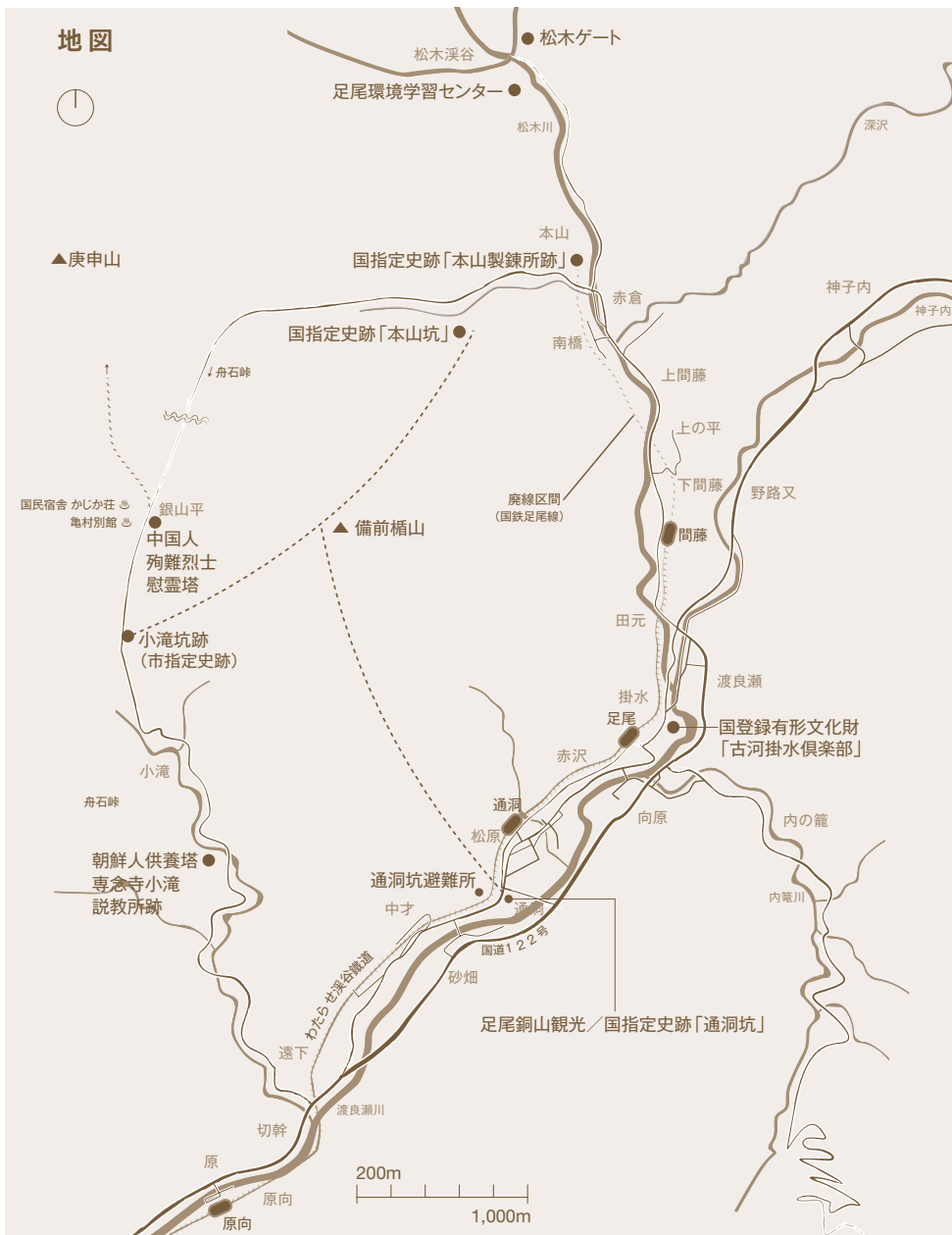
- A 製鍊所
- B 鉄索
- C ダイナマイト爆破
- D 鉱脈
- E 削岩機・トロック/スクレppa運転
- F 下抗口削岩機トロック運転
- G 上抗口削岩機トロック運転
- H エレベーター機械室
- I リフト機械室

おわりに

最後まで読んでくださり、どうもありがとうございました。

冊子の中には、既に知られていることもあれば、ちよと聞いたことのない場面、信じられない内容もあったかもしれません。もし、足尾に少しでも興味を持たれたなら、是非とも実際に足尾に足を運んで現地の姿に触れて頂けたら嬉しいのです。

聞き取りを続けて気づくのは、「足尾の人は本当に足尾が好きだ」ということです。聞き取りでは、「自分が話すことなんて何も無い」「ちゃんとした資料みたいな話じゃない」と言いながらもどんどん話が広がります。また、日常の中でも足尾の場所や歴史の話題になると、周りの人が自分の経験談や知っていることを話しかけてくれます。そして、それぞれの話が濃くて果てがないので、立ち話を辞めるタイミングがなく、あつという間に時間が過ぎます。自分の暮らす場所について、こんなに話せるものかな…、いつも驚きつつ不思議に感じます。郷土愛だけではない何か、自分の住んでいる場所をもっと知りたい気持ちや、豊かな思い出を伝えたいという想いもあるのかもしれない。そんな話し手の方の人間味もひつくるめて、聞き取りを進めていきたいです。



足尾はば全域 MAP『日光市足尾地域 移住促進リーフレット 足尾に、住んでいる。』(2013年、日光市)を転用

年表（足尾の聞き取りや日常生活で、必要なキーワードや出来事。）

和暦	西暦	できごと	人口
天文19	1550	銅山が ¹ 発見される：古河鉱業(株)(現在、古河機械金属(株))閉山時発表	
明治10	1877	古河市兵衛が銅山を買収、経営を開始	
明治14	1881	鷹之巣坑で直利を発見	
明治16	1883	本口坑で大直利を発見	
明治24	1891	田中正造が帝国議会で鉱毒問題を質問	11,664
明治29	1896	第1回(鉱毒)予防工事命令発令(明治36年まで5回)	11,448
明治34	1901	田中正造が ² 鉱毒問題で明治天皇に直訴	22,708
明治35	1902	足尾銅山との示談により旧松木村廃村	22,708
明治40	1907	坑夫による大暴動事件が ³ 起こる	34,824
明治41	1908	本山に生活協同組合「三養会」を開設 (明治39年に三養会設立準備会発足、本山三養会一部開店)	28,618
大正元年	1912	足尾鉄道 桐生駅～足尾駅開通	29,774
大正10	1921	県内初のメーデーを足尾で開催	27,387
昭和15	1940	この頃から朝鮮人労働者が銅山の労働に従事	23,187
昭和19	1944	中国人が ⁴ 強制連行され坑内労働に従事	
昭和20	1945	足尾銅山労働組合同盟会結成	20,997
昭和29	1954	小滝坑廃止、フィンランドのオートクンプ社から自溶製錬技術を導入	
昭和31	1956	「自溶製錬法」、「電気集塵法」、「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を 世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功	
昭和48	1973	足尾銅山閉山(2月28日)	8,699
昭和53	1978	日足トンネル開通(延長2,765m)	
昭和55	1980	足尾銅山観光オープン。坑内観光が ⁵ 始まる	
昭和63	1988	製錬所が事実上の操業停止	4,935
平成18	2006	今市市、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村が ⁶ 新設合併し、 新たに日光市が ⁷ 誕生	3,196
平成27	2015	(現在)	2,287

〔典拠〕

『足尾町閉町記念 足尾博物誌』(平成18年2月足尾町)、『足尾銅山近代化産業遺産MAP』(平成26年3月、第6刷改訂版 日光市教育委員会事務局文化財課世界遺産登録推進室)より引用。人口データは、『足尾町閉町記念 足尾博物誌』、永井護「足尾銅山の生産システムの変遷と空間的都市構造」(平成20年7月1日、日光市教育委員会足尾銅山跡調査報告書)他、広報あしお、広報にっこうを参考にしている。

古河

足尾銅山の事業主である古河鋳業株式会社（現在の古河機械金属株式会社）のことを指す。足尾の人が話の中で使う古河には、大きく足尾銅山の事業主である古河の会社全体を指しているといえる。会社のマークは「山一筋」の意味のヤマイチ。

古河市兵衛

古河財閥の創設者。天保3(1832)年－明治36(1903)年。明治10(1877)年に足尾銅山を譲り受け、銅山経営を開始。座右の銘「運・鈍・根」にあるように数年で大直利(銅脈)を当て一気に足尾銅山を繁栄させ、鉱山王と呼ばれた。

田中正造

足尾鋇毒事件に身を捧げる。天保12(1841)年－大正2(1913)年。明治13(1880)年栃木県議会議員、明治23(1890)年に衆議院議員に当選、この年の8月に渡良瀬川大洪水がおこり、大問題になる。翌明治24(1891)年「足尾銅山の儀につき」を帝国議会で始めて質問。明治34(1901)年12月天皇直訴、義人の名を高める。

足尾の公害

「日本の公害の原点」といわれる足尾銅山における公害は、山本(足尾やその周辺)での煙害と、渡良瀬川やその下流域での水質汚濁、土壌汚染である。自然的要因に加え、用材・坑木・薪炭材需要による森林の大量伐採(6800ha)、明治20年松木大火(1100ha)、亜硫酸ガスなど有害物質の大気中放出などにより山林が荒

廃。この煙害は、昭和31年(1956)年自溶製錬法が導入され、従来に比べ亜硫酸ガス的大幅な排出削減に成功。水害は、明治14(1881)年からの急激な産銅量の増加に合わせ、明治18(1885)年鮎大量死など漁業への被害から農作物へと、被害が徐々に現れるようになり、深刻な被害が発生したのが、明治23(1890)年の渡良瀬川大洪水の時だった。渡良瀬川、下流地域での水質汚濁と土壌汚染は深刻な影響を及ぼし、大きな社会問題へと発展した。

三養会

足尾銅山生活協同組合三養会。生協の発祥と言われている。明治41(1908)年に本格活動を開始し各社宅地域に売店があり、足尾町民の生活を支えた。現在は通洞売店と渡良瀬売店の2箇所が営業。

足尾の主要な3つの坑口

足尾では備前楯山から銅を採掘していた。作業場まで入る主要な坑口は「小滝坑」、「本山坑」、「通洞坑」の3つ。各坑口周辺には銅山施設や住居施設があった。現在では通洞坑の一部が、足尾銅山観光として見学できる。

参考：ふるさと足尾歴史セミナー自主研究会(文)、足尾町文化財調査委員会(監修)、『足尾銅山百選―産業遺産保存活用の手引き』、2004年

ごめんください、足尾のこと教えてください！——地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集

発行日…2015年3月30日

発行…日光市役所足尾総合支所総務課

編集…日光市足尾地域おこし協力隊

デザイン…木村稔将

協力…聞き取りに協力してくださった皆さま、古河機械金属株式会社、

新井雅之、栃木県立文書館、安塚菓子店、皆川俊平、好井裕明

写真…伊東信、新井常雄、地域おこし協力隊

●聞き取り調査の資料を閲覧希望の方は、日光市役所足尾総合支所総務課までお問い合わせください。

日光市役所足尾総合支所総務課

〒321-1514 栃木県日光市足尾町通洞8-2

TEL…0288-93-3115

© 禁断断転載

「写真について」

この冊子に掲載している主な写真は、現在も足尾で暮らす伊東信さん（95歳）が撮影したものです。伊東さんは、昭和18年に鍛工として古河鋳業に入社した時に、当時高価だったカメラを中古で購入し、戦後足尾に戻ってから撮影活動を本格的に開始。仕事をしながら、休日写真仲間と松木などの足尾のあちこちを回ったり、社宅や家族の日常を写しながら、足尾町の芸術祭やコンクールなどで発表してきました。写真の裏には撮影日や、タイトルなどがメモされているおかげで、当時を知る貴重な手がかりとなっています。（掲載写真のキャプションはメモより抜粋）最近はお気に入りの柳の絵を描いたり、日記をつけるのが日課です。